

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第14次調査報告書①

なかこし
中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1995

宮田村遺跡調査会

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第14次調査報告書①

なか こし
中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1995

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて、13回にわたる調査を実施し、記録保存をはかってきました。平成6年度も、第14次調査として、区画整理の第I工区内の2箇所で発掘調査を実施しました。この報告書は、そのうちの、台地南縁に近い村道27号線西端の南側に接して設けられた児童公園（ひまわり公園）用地部分の調査記録です。

調査の結果、多量の遺物と共に、縄文時代中期の住居址17軒、竪穴23基、土坑38基が発見されました。特記すべきものとしては、3軒の住居址から出土したまとまった量の縄文中期中葉の土器、中期後葉の住居址の壁下の床面に接して出土した完形の土偶、縄文中期後葉の終りの時期の7個の完形土器が出土した竪穴などがあり、調査地点の北側に以前から確認されていた東西に走る溝が、その時期の土器を廃棄した場所であったことも確認できました。

予想していた以上の遺物と遺構が出土した関係で、当初予定した期間内に調査を終了させることができずご不便をかけましたが、幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により、初期の目的を果たすことができました。それらの皆さんと、宮田村遺跡調査会会長友野良一先生をはじめとする、現場での作業にあたられた方々に感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成7年3月15日

宮田村教育委員会

教育長 小林 守

例　　言

1. 本書は、平成6年度に実施した、西原土地区画整理事業に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
4. 報告書中の遺構実測図や拓影図の縮小率は次のようにしてある。
遺構全体図……1/400　　住居址……1/80　　縄文土器拓影図……1/3
5. 本調査にかかる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目　　次

序

例　　言

第1章　遺跡の概観と調査の経過	1
第1節　遺跡の立地	1
第2節　調査の経過	3
1　調査にいたるまで	3
2　調査の組織	3
3　調査の経過	4
4　遺構と遺物の分類について	4
第2章　遺構と遺物	7
第1節　遺構検出状況	7
第2節　縄文中期の遺構と遺物	7
1　住居址	7
(1) 258号住居址　(2) 259号住居址　(3) 260号住居址　(4) 261号住居址　(5) 262号住居址	
(6) 265号住居址　(7) 266号住居址　(8) 267号住居址　(9) 268号住居址　(10) 269号住居址	
(11) 270号住居址　(12) 271号住居址　(13) 272号住居址　(14) 273号住居址　(15) 274号住居址	
(16) 275号住居址　(17) 276号住居址	
2　竪　穴	33
(1) 中期後葉I期の竪穴　(2) 中期後葉II期の竪穴　(3) 中期後葉III～IV期の竪穴	
3　土　坑	35
(1) 中期中葉の土坑　(2) 中期後葉I期の土坑　(3) 中期後葉II期の土坑　(4) 中期後葉III～IV期の土坑	
4　土器捨て場	36
第3章　ま　と　め	48

第1章 遺跡の概観と調査の経過

第1節 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇側部に位置し、扇端である犬竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある（図1）。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

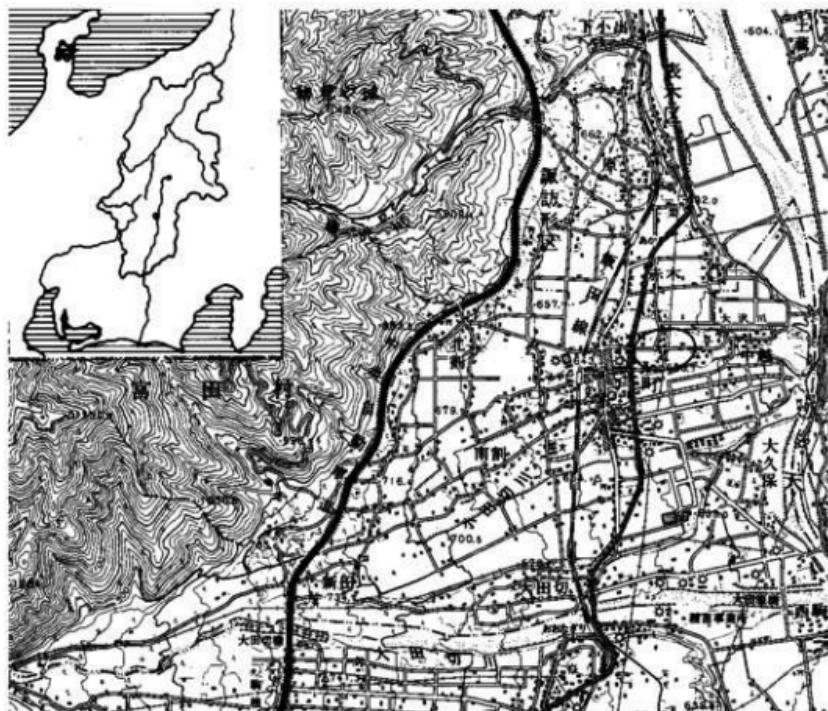


図1 位置図(5万分の1)

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐塙土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定される。今回の調査地点の北にも東西方向に走る溝があったことが区画整理前の地図等で確認できるが（このことは、その溝が相当深かったことを示していよう）、急速な宅地化が進んでいる現在、そのような微地形は地上では見ることができなくなりつつある。遺跡一帯で少し前まで、石積みを設けて畑を平坦に整地した痕が所々に見られており、現地形は、かなり整地された後の姿なのである。

調査地点の縄文時代の地表面は、北縁は先の溝に向かって傾斜しているが、全体は東の方向にゆるく傾斜する平坦面であり、西縁の中央付近の表土下が礫混じりの黄褐色土であることから、以西は尾根状に高くなっていたことが想像される。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐塙土の深い地点では、黒褐色土の上に黑色土が存在し、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切扇状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐塙土の浅い地点では、

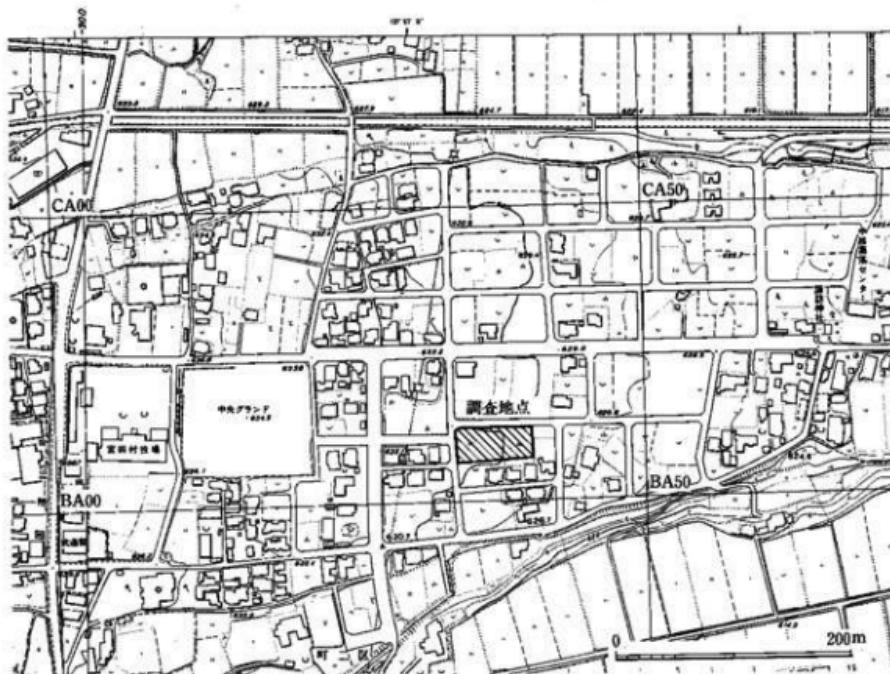


図2 調査地点図（「宮田村平面図」－平成元年12月作成－をもとに作図）

それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文時代前期の集落と台地南縁に連なる縄文時代中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集礫構造までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

第2節 調査の経過

1 調査にいたるまで

昭和54年に策定された西原土地区画整理事業は、昭和62年に着工にいたり、現在も継続中であるが、それに伴って埋蔵文化財を保存する必要が生じたため、宮田村教育委員会では、宮田村遺跡調査会を組織し、発掘調査を実施して記録保存を図ってきた。

本報告の平成6年度の調査は、第14次西原地区埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成6年4月5日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会长友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長小林守を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成6年4月5日から平成7年3月15日までを委託期間としている。

調査地点は、東西に広い遺跡の中央の、台地南縁に近い、村道27号線と33号線が交わる地点の南東側に設けられた公園部分である(図2)。契約に先立って設計図等によって工事計画を検討したところ、用地東半の中央部は、現地表に若干の盛り土をしてゲーム広場にするだけということであったので、工事に際して表土から下の土を動かさないよう指導ただけで調査対象からは除外した。なお、北東角には平成4年度に消防防火水槽が設置され、発掘調査もされている。

2 調査の組織

今回の遺跡調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会		◇宮田村教育委員会		◇調査参加者
会長	友野 良一	教育次長	小林 修	小田切守正
委員	片桐 貞治(9月まで)	係長	原 勤	松下 末春
〃	平沢 和雄	係	小池 孝	木下 道子
〃	青木 三男			酒井 鮎子
〃	伊東 醍一			林 美弥子
〃	唐木 哲郎			
〃	加藤 勝美			
〃	太田 保(10月から)			
教育長	小林 守			

3 調査の経過

現場における発掘作業と遺物水洗作業は、平成6年4月14日から9月6日まで実施した。初め東半の外周部分をトレンチ状に表土を剥いだところ、南側に多くの竪穴と土坑が発見された。特に竪穴は、いずれも深く、掘り上げるのにかなりの時間を要してしまった。また、遺構はいくつかに群別が可能かとも見えたが、調査範囲が狭かったために全体の状況を把握することが困難で、遺構の調査に手間取った感もある。そこで検出された5軒の住居址は、1軒を除いて表土下の検出面からの深さが浅く、遺物の量もさほど多くはなかった。

以後、5月の後半から6月の初めにかけての個人住宅の建設に伴う調査を挟みながら北縁部の調査へ入ったのだが、そこで北方の溝へ向かった土器捨て場に遭遇し、遺物量の多さから遺物の取り上げに苦労した。多量の遺物が出土した場合、包含層下面で何らかの遺構が検出されるであろうという前提で精査に入るわけだが、性格を早めに把握し、それなりの調査をすべきであったと反省させられた。

最後に西半の調査に入り、初めに東西方向に幅4mのトレンチを3本入れたところ、いずれのトレンチでも住居址の存在が確認されたので、順次必要に応じて拡張し、結果として図3の範囲を調査した。工事の際、西端の発掘していない部分に遺構がないことが確認されており、西原土地区画整理事業に伴う第10次と第13次調査の結果を合わせても、今回は集落の北西縁を発掘したと判断される。住居址は中期中葉から後葉にわたる12軒が検出されたが、特に、中期中葉藤内期のまとまった遺物を入手することができた点は、中越遺跡の縄文中期の継続性を具体的に補強するものとして意義深いものがあろう。繩ジャステックに委託してラジコンヘリによる調査地点の俯瞰写真撮影を計画していたので、遺構は最後まで埋め立てることなく掘り上げた状態におきシートで保護しておいたのだが、今まで、狭い道路部分の調査で、掘り上げた土を用地内でやり繰りしながら1軒1軒調査する場合が多かったので、掘り上げた土の処理は大変であった。俯瞰写真撮影は7月29日に実施している。現場での作業が終了したのは8月19日。9月6日までに遺物水洗など外作業を終えている。

平成6年度の整理作業は、12月から本格的に実施したが、今回の報告書に、遺物の実測図を掲載できるまでの充分な整理をすることができずに終わってしまった。先程もふれたように、特に土器では、縄文時代中期中葉の良好な資料を得ているわけで、今後、機会を得て実測図を発表したいと考えている。調査地点を、遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、BC～BG列の34～40グリッド（図2、3）ということになる。

4 遺構と遺物の分類について

あらためて住居址について定義することは省くとして、今回検出した遺構のうち、竪穴と土坑について、以下のように定義し分類を進めることとする。

土坑：径50cmから1mの穴で、多分に感覚的だが、当時の人が掘ったと判断されるもの。整わない形態のものは大きめでもこの中に含めたものが多い。

竪穴：径1mから2m位でやはり人が掘ったと判断されるもの。桶状にきっちりと掘られ、深さも深い場合が多い。

遺物の分類は、「中越遺跡発掘調査報告書」（宮田村教育委員会1990）での基準と呼称をそのまま使用している。ただ、縄文中期の土器の時期区分については、「長野県史考古資料編(四)遺構と遺物」に従った。また、遺跡地には、昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区の呼称は、グリッド設定当時のものでなく前記報告書に従った。

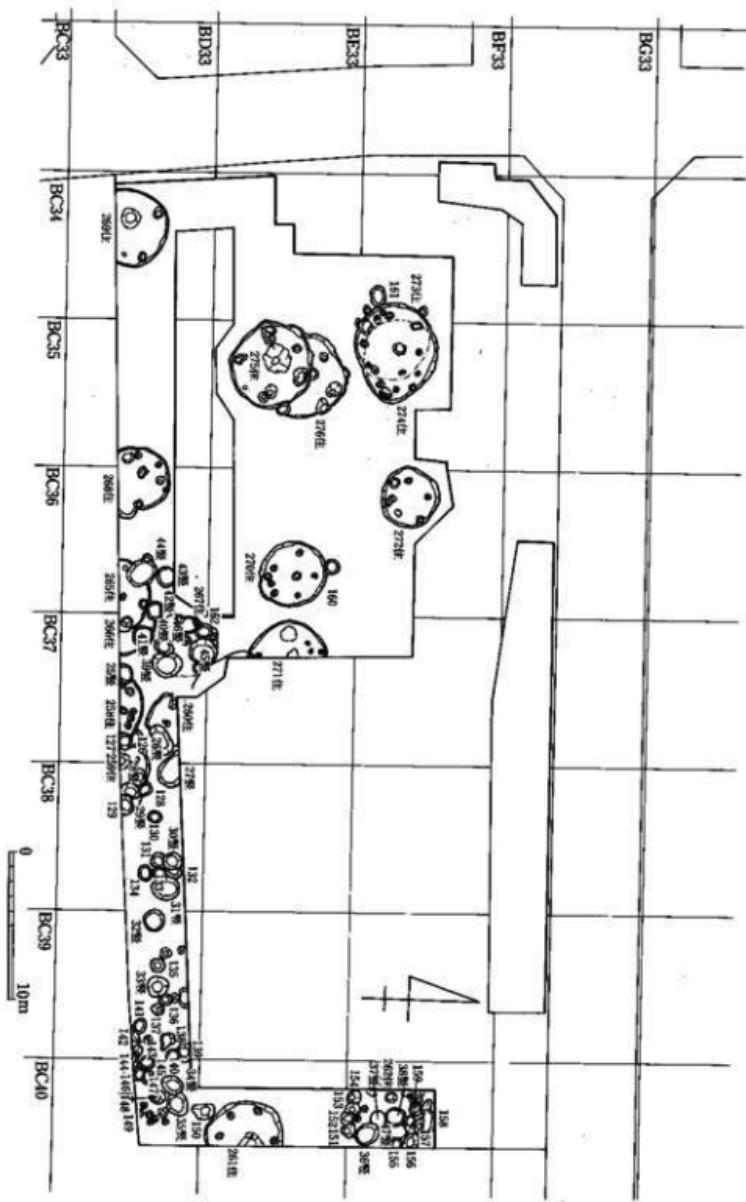


図3 遺構全体図（住：住居址、豎：竪穴、番号のみは土坑）

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構検出状況

今回の調査で検出した遺構は全て縄文時代中期に属し、住居址17軒、竪穴23基、土坑38基を数える。そのうち、中期中葉4軒、後葉13軒の住居址は調査範囲の全体から検出されているが、中期中葉の住居址は用地中央から北側だけに分布しており、推定されている集落占地の変遷に則った形となっている。

一方、竪穴と土坑は、住居址と異なり、南東にのみかなり濃密に分布している。明らかに土坑群、竪穴群といつていいだろう。ただ、東半の中央が工事による破壊をまぬがれ調査されなかつたことから、北東隅の262号住居址付近にある竪穴と土坑の一群が、南縁の東半に検出された土坑群、竪穴群と一体をなすのかは、今回の調査だけでは判断しかねる。竪穴で注意されるのが、竪穴群の中では西端の、265号住居址から267号住居址にかけて検出されたきわめて整った形の一群である。中に埋土の中位に中期後葉末のIII期からIV期にかけての完形の土器が発見された竪穴が2基あり、そのうちの1基からは7個体がまとまって出土した。同様の竪穴が、区画整理事業地の南東隅、B C 53グリッド地点で発見されており、該期の集落構造を検討する上で欠かせないものとなろう。

第2節 縄文中期の遺構と遺物

I 住居址

(I) 258号住居址

BD-33グリッドに検出されたが、用地にかかるのは北側の一部で、規模や平面形までは推定できない(図4)。東側で259号住居址と切り合うが、ちょうどその部分を126号土坑と127号土坑に切られるため、前後関係は遺構からはわからない。また、西壁を25号竪穴によって切られてもいる。検出面からの掘り込みは10cm程度と浅く、粘土質黄色土で貼った床面はさほど堅くない。部分的に周溝がある。柱穴はP₁もしくはP₂とP₃が考えられる。それ以外の施設は用地内にはない。遺物はごく小量で、土器(図5-1~6)は中期中葉と後葉が混在しており、石器には黒曜石の剥片が1点しかない。

所属時期を決定するのは困難だが、遺物等から中期後葉II期以降としておきたい。

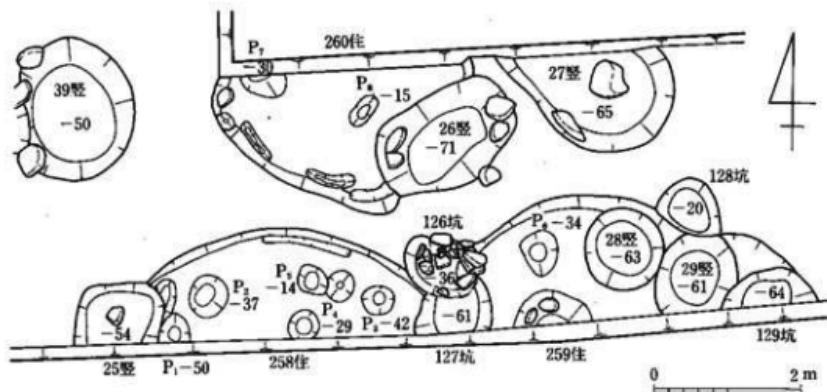


図4 258～260号住居址、25～29・39号竪穴、126～129号土坑実測図

(2) 259号住居址

258号住居址の東に接してB D 37-38グリッドに検出されたが、接する部分に土坑があり、造構からは同址との前後関係はわからない。東壁を2基づつの竪穴と土坑に切られている。258号住居址と同様、南側が大きく用地外となっているため規模や平面形はわからない(図4)。P₆の柱穴1本と、用地ぎわに縁石を抜き取られた炉の残骸が確認された。床面には粘土質黄色土が貼られている。調査した範囲には周溝はない。

遺物はやはり少ないが、土器(図版19-1、図5-7~12、6-1~5)は単純で後葉II期の沈線を地文とするものと繩文を地文とするものがほとんどである。石器は石鏃2、礫石錐1と、粗大剝片1、黒曜石の剝片2がある。

中期後葉II期の住居址である。

(3) 260号住居址

B D 37グリッドの北半に検出されたが、造構の北半は調査していない。南東壁が26号竪穴によって破壊されている(図4)。平面形が北西方向に輪線をおく丸みをもった隅丸方形で、一辺3m前後の小型の住居址が想定できる。検出面からの掘り込みは20cm前後で、床面は粘土質黄色土によって貼られ、壁下に断続的に周溝が検出された。他の施設は、柱穴にP₇が相当するだろう以外はわからない。

遺物は少なく、埋土から後葉II期の破片が小量出土しただけ(図6-6~12)、石器は打製石斧2と黒曜石の剝片類3が出上しただけである。

やはり中期後葉II期の住居址としていいだろう。

258号住居址



259号住居址(1)

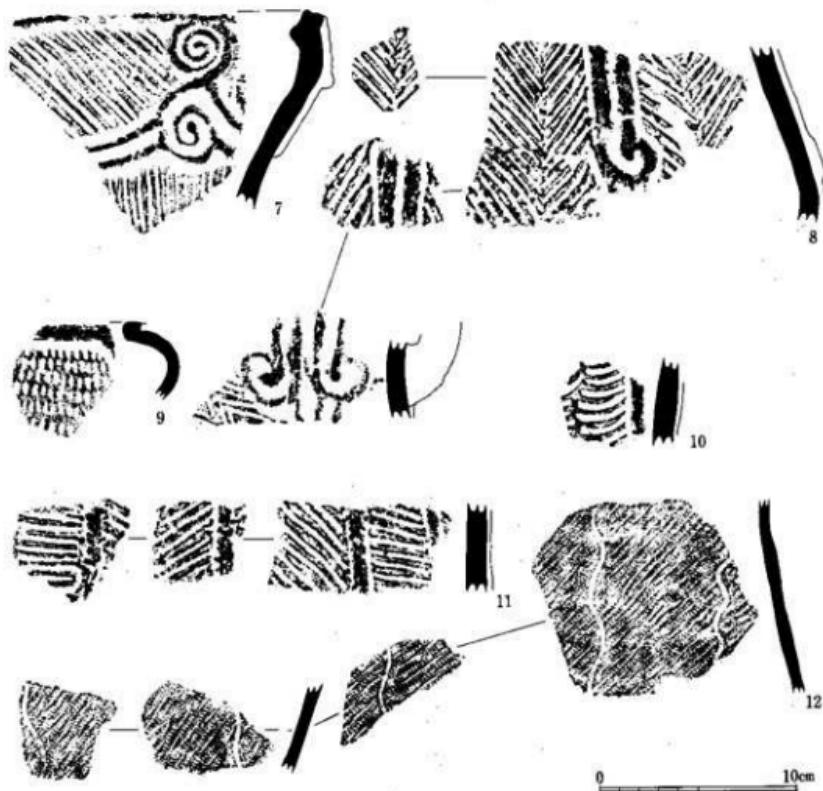
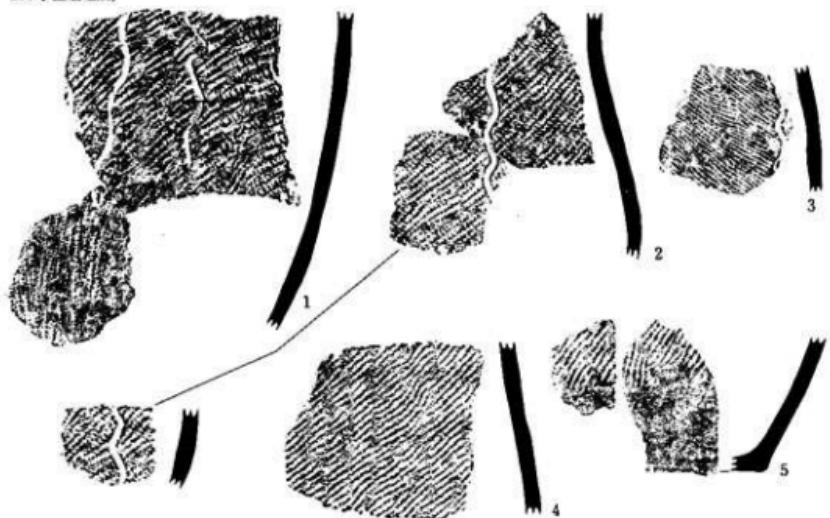


图5 258·259(1)号住居址出土土器拓影图

259号住居址(2)



260号住居址



图 6 259(2)·260号住居址出土土器拓影图

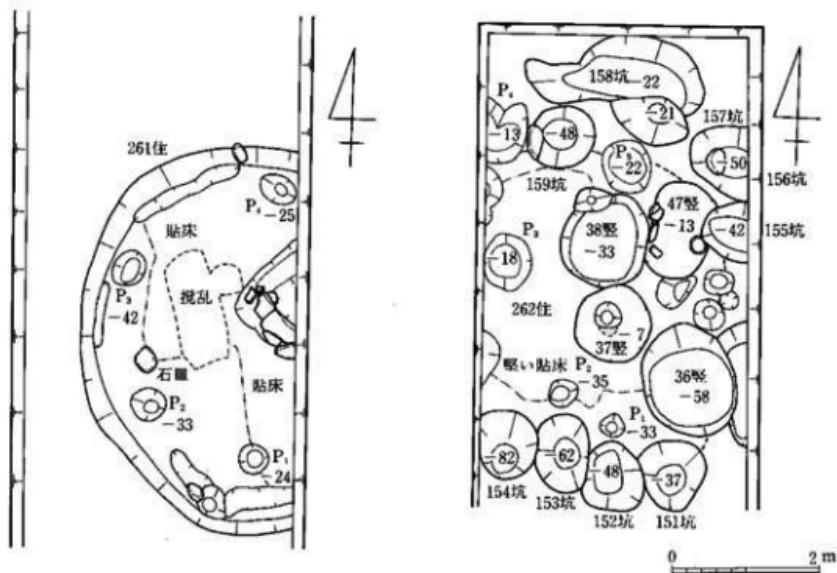


図7 261・262号住居址、36~38・47号竪穴、151~159号土坑実測図

(4) 261号住居址

B E 40グリッドに検出された住居址で、東側3分の1ほどが用地外となる(図7左)。平面形は径5m程度の円に近いとしかいえないが、後述する炉の位置から、軸線は北東方向となろう。中央西よりの床面が、ごく最近破壊されていた。検出面からの掘り方は深く、30~40cmを測る。北と南の壁下に周溝が検出されたが、南側は壁からやや内側に入った位置にあり注意される。柱穴はP₁~P₄の4本のほか1~2本が想定される。床には粘土質黄色土が貼られているが、図の一点鎖線から西では粘土質黄色土が見られず、礫が多く含む砂質黄色土が顔を出していた。炉は、中央からかなり北寄りに位置し、長い平板状の石を平たく組んだ大きな石圓炉で、炉石の内側の縁は、炉穴の中にかなり張り出していたようである。北西辺の炉石は抜かれていた。

遺物は一定量出土しており、土器は後葉II期が主体で(図版19-2、図8)、石器は打製石斧7、粗大石匙1、横刃型石器4、磨製石斧2、敲打器6、敲打製石器1、石皿1と、粗大剝片類4、黒曜石の剥片類13が出土している。このうち石皿は、西壁に近いP₂の北の床面に伏せた状態でおかれていたもので、中央で縦に割れていた。また北壁に貼りつけたような状態に、炉縁石の下に詰めた状態にいずれも大型石器の原石が置かれており、敲打痕のある多くの石器の出土とあわせると、石器製作もしくは石器原料収集にかかわった住居との解釈も成り立つだろう。

中期後葉II期の住居址である。

261号住居址

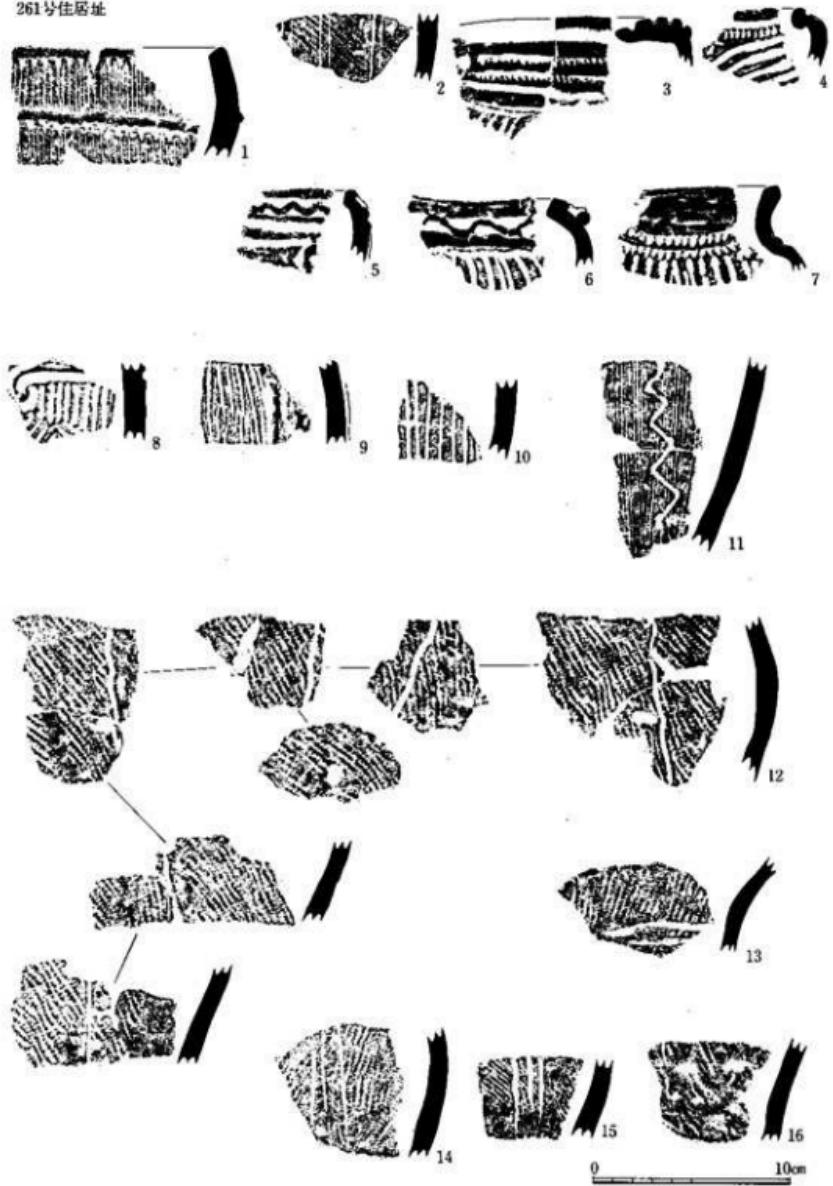


图8 261号住居址出土土器拓片影

(5) 262号住居址

用地北東隅、B F 40グリッドに検出された住居址で、東側は用地外のため、西側は調査対象地域から除外したため調査していない(図7右)。明瞭な貼り床が発見され、住居址であることは間違いないが、一面に多くの穴が存在しその部分の床面がないことから、住居址の輪郭はおぼろげにしかわからない。それらの穴は竪穴と土坑であって、いずれも住居址を切っているものと解釈したが、その中に住居址に付属する施設がある可能性も否定できない。住居址については、床面が粘土質黄色土によって貼られ、その中央部がしっかりと堅いこと、37号竪穴中央の焼土が住居址の炉の痕跡である可能性があること、 P_1 と P_2 のどちらかが柱穴であろうこと程度のことしか読み取れない。なお35号竪穴と47号竪穴は掘り込みが浅いがその整った形態から竪穴と解釈した。47号竪穴内の、埋置された土器と西壁に接する礫群は竪穴に所属するものということになる。

遺物は、竪穴や土坑の範囲のものを除くとさほど多くない。土器には後葉I期の略完形土器(図版19-3)と中葉から後葉II期までの破片があり(図10-1~17)、石器には打製石斧8、横刃型石器2、磨製石斧2、敲打器1、石鎌1と、土偶の腕部1、土製円板1が出土している。

遺物には所属時期の決め手が少ないが、前段の竪穴や土坑との前後関係の解釈に従えば、後葉I期よりも古い時期ということになるが、略完形土器を考慮すれば、竪穴と時期差のない後葉I期のうちに廃絶時期を設定することになろう。

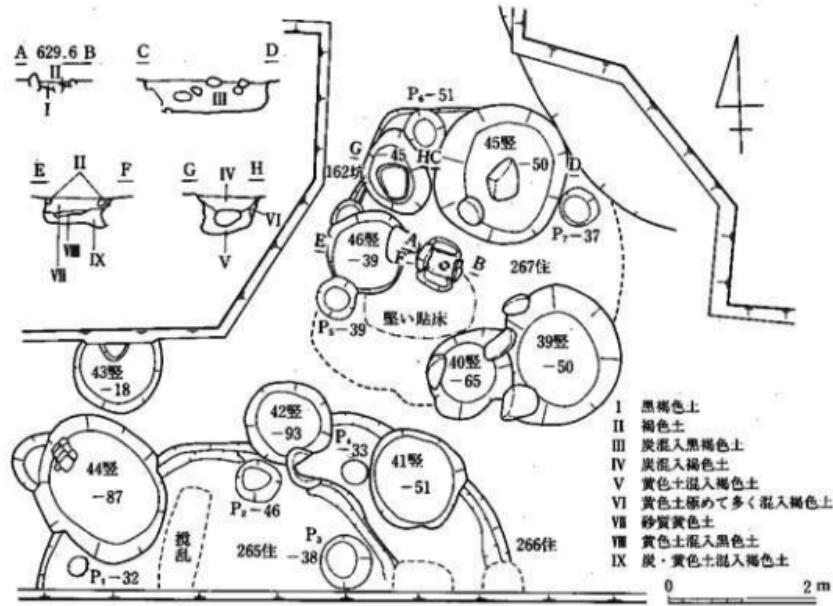
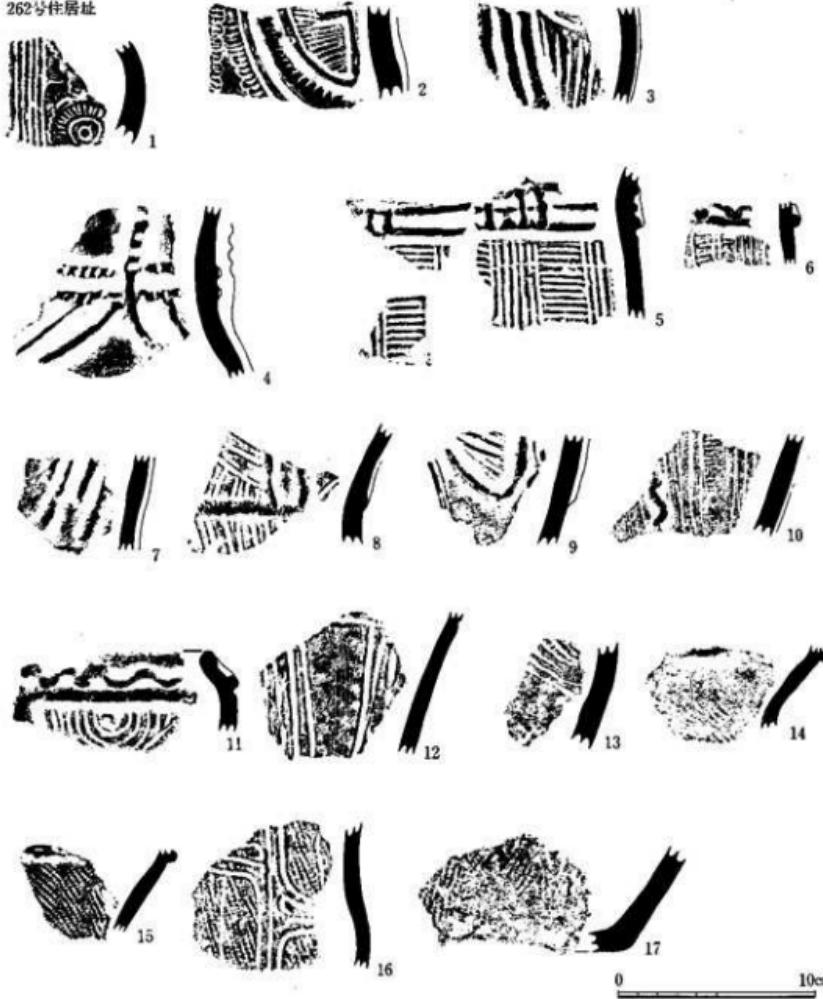


図9 265~267号住居址、39~46号竪穴、162号土坑実測図

262号住居址

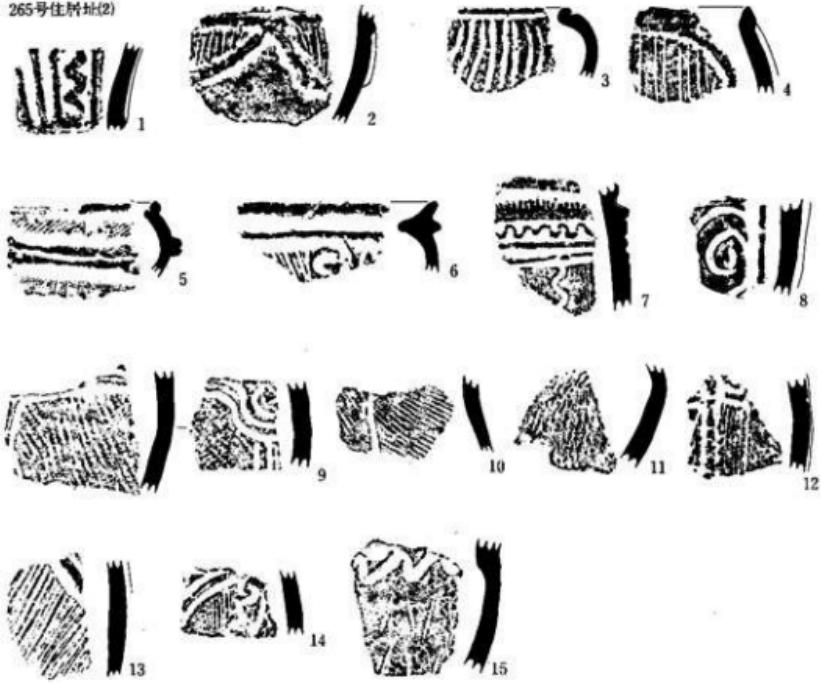


265号住居址(1)



图10 262·265(1)号住居址出土土器拓影图

265号住居址(2)



266号住居址



267号住居址



图11 265(2)·266·267号住居址出土土器拓影图

(6) 265号住居址

B D - 33グリッド東端に検出され、266号住居址を切っているほか、北西壁を切って44号竪穴が構築されている(図9)。南半が用地外となるため、平面形は径5m程度の規模の円形に近いものと推定されるだけである。検出面からの掘り込みは約30cm。西側を除く壁下に周溝が巡り、床面は粘土質黄色土によって貼られている。柱穴は3本確認されたが、炉は南の用地外に位置しているため調査していない。西方の床が帶状に破壊されていた。

遺物はさほど多くなく、土器は後葉のI期からII期が主体で(図10-18~20、図11-1~15)、石器には打製石斧・磨製石斧・礫石錐各1、横刃型石器3と小量の黒曜石剝片類がある。

決め手が少ないが、切り合い関係と主体となる土器から、中期後葉II期の住居址としたい。

(7) 266号住居址

265号住居址の東に接し、大部分が265号住居址に切られた状態で検出された住居址で、北壁を2基の竪穴によって切られている。さらに南半が用地外となるため、調査した部分はごく一部ということになる(図9)。平面形や規模は特定できない。検出面からの掘り込みは10cm程度と浅く、壁下を周溝が巡り、床には粘土質黄色土が貼られている。P₄は柱穴としていいだろう。

遺物はごく小量だが土器(図11-16~19)は単純で後葉I期。石器は磨製石斧1点のみである。中期後葉I期の住居址である。

(8) 267号住居址

266号住居址の北、B D - 37グリッド北西隅に検出された住居址で、4基の竪穴と1基の土坑によって切られ、さらに北東隅も住居址によって切られている(今回の工事による影響がないと判断した地域にあり、存在を確認しただけである)(図9)。トレンチ調査による遺構検出時すでに床面が見つかっており、検出面からの深さは最大数cmとごく浅い。床には粘土質黄色土が貼っており、その範囲から平面形は、西からわずかに北方向に軸線をおく丸みをもった隅丸方形が推定できる。中央西寄りにある炉は土器埋設石窯炉で、細長い石を立てて方形に組んだ炉石のうち南と北はすでに抜かれてしまっていた。埋設土器も一部欠けている。炉の周囲の床が堅く、柱穴はP₅~P₇の3本と40号竪穴の位置に1本の4本柱が想定できる。

遺物は少ないが、土器に後葉I期の完形があり(図版19-4)、破片も大部分が同期で(図11-20~22)、石器はない。

特徴的な炉形態からも、中期後葉I期の住居址と断定できよう。

(9) 268号住居址

B D - 35・36グリッドに検出された住居址で南の一部が用地外となる(図12)。平面形は軸線が北西方向の、径4~5mの円に近い形としかいえない。検出面からの深さは30cm。壁下を周溝が巡り、床面には粘土質黄色土が貼られているが、図で一点鎖線から外側は軟らかい。炉の北東には貼り床が観察されない部分があった。柱穴はP₂~P₄と用地外の1本の4本柱となろう。炉は北西方向に長軸をおく長方形の石窯炉で細長い石を立てて組んであり、南東辺の一部には炉石がな

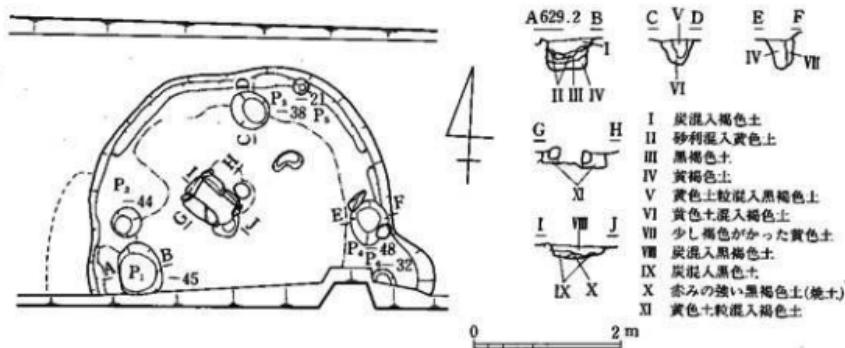


図12 268号住居址実測図

い。南東の張出部に見える部分が住居址に付属するものか否かは確定できなかった。

遺物は多くなく、土器は後業Ⅰ期が主体で(図14-1~11)、打製石斧・横刃型石器各3、磨製石斧2、礫端叩石・礫石錐・石錐各1と黒曜石の剥片類7が出土している。

遺物と炉の形態から、中期後業Ⅰ期の住居址である。

(10) 269号住居址

用地南西隅、BC34グリッドに検出され、南端は用地外となる(図13)。埋土上層に厚く黄色味の強い土が入っており、遺構と判断するのにかなり手間取ってしまった。平面形は西からやや北方向に軸線をおく一辺5mほどの丸みの強い隅丸方形が推定される。検出面からの掘り込みは深く50cmを測り、壁下には周溝が検出されている。床面は粘土質黄色土によって貼ってある。炉は中央西寄りに位置し、大型の石圓炉であったのだろうが、炉縁石は全て抜かれており、底面に焼けた部分がわずかに残っていただけである。掘り炬燵状の形態が想定される。柱穴はP₁P₂と用地

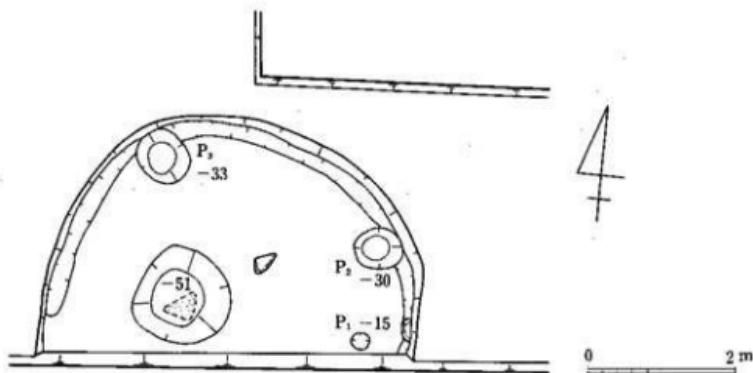
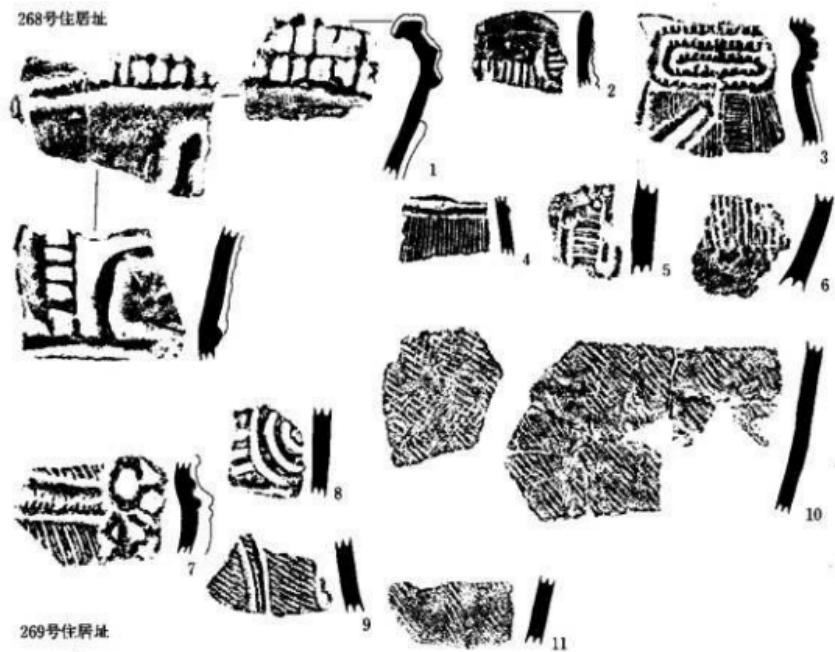


図13 269号住居址実測図

268号住居址



269号住居址

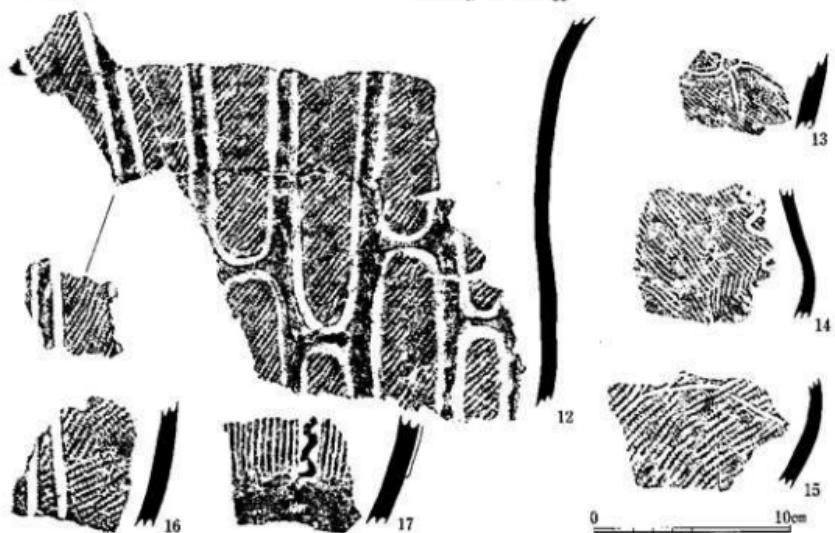


图14 268·269号住居址出土土器拓影图

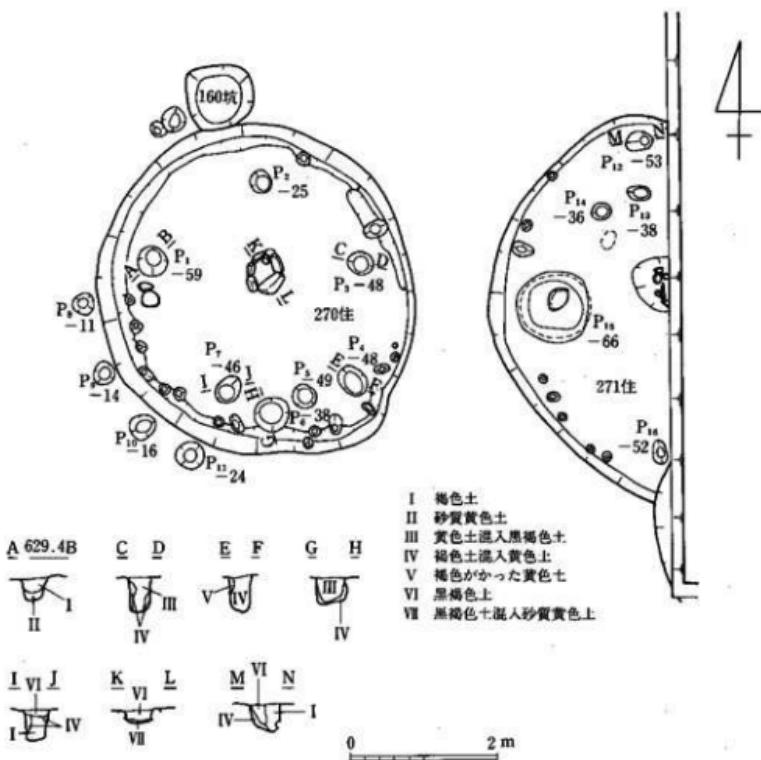


図15 270・271号住居址、160号土坑実測図

外に2本の4本柱となろう。

遺物は多くないが、土器（図14-12～17）に後葉III期の大破片があり（12）、石器には打製石斧2、横刃型石器3、粗大石匙・磨製石斧・敲打器・砾石錘・石匙各1と、粗大剥片類7、黒曜石の剥片類6がある。

中期後葉III期の住居址としたい。

(1) 270号住居址

B E36グリッドに発見された住居址で、北に160号土坑が接している。軸線を北北西に置き、平面形は軸線方向にやや長い円形で、4.2×4.6m程度の規模となろう。検出面からの掘り込みは深いところで30cmほどで、壁下には南東の一部を除いて周溝が巡っている。床面は粘土質黄色土で貼ってあるが、北西側では床面に砾が顔を出している状態にあった。炉は丸みをもった板状の石を立てて組んであり、南辺の石だけ特に大きく、北東隅の小石は内側へかなり傾いていた。柱穴はP₁～P₄とP₆～P₇の6本で、P₅と、その南の壁がわずかに張り出した部分を入り口施設と解釈し

270号住居址(1)

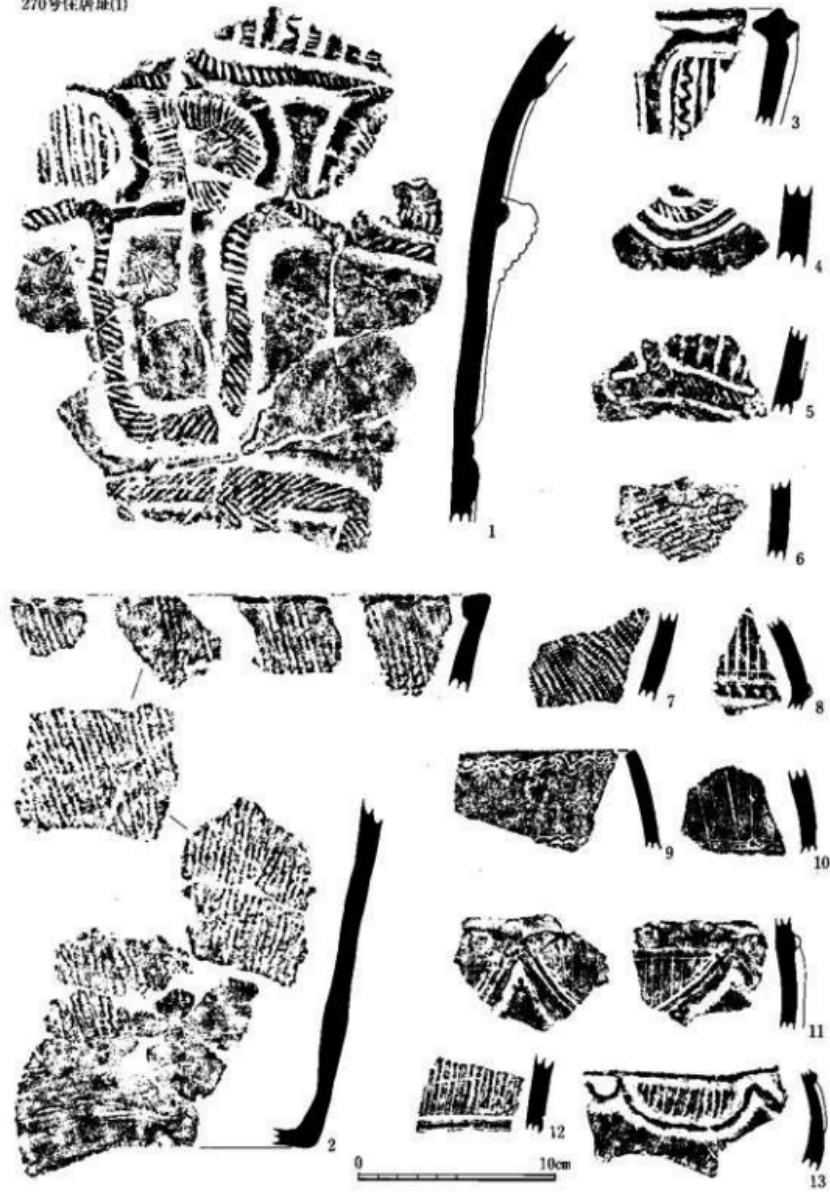


图16 270(1)号住居址出土土器拓影图

270号住居址(2)

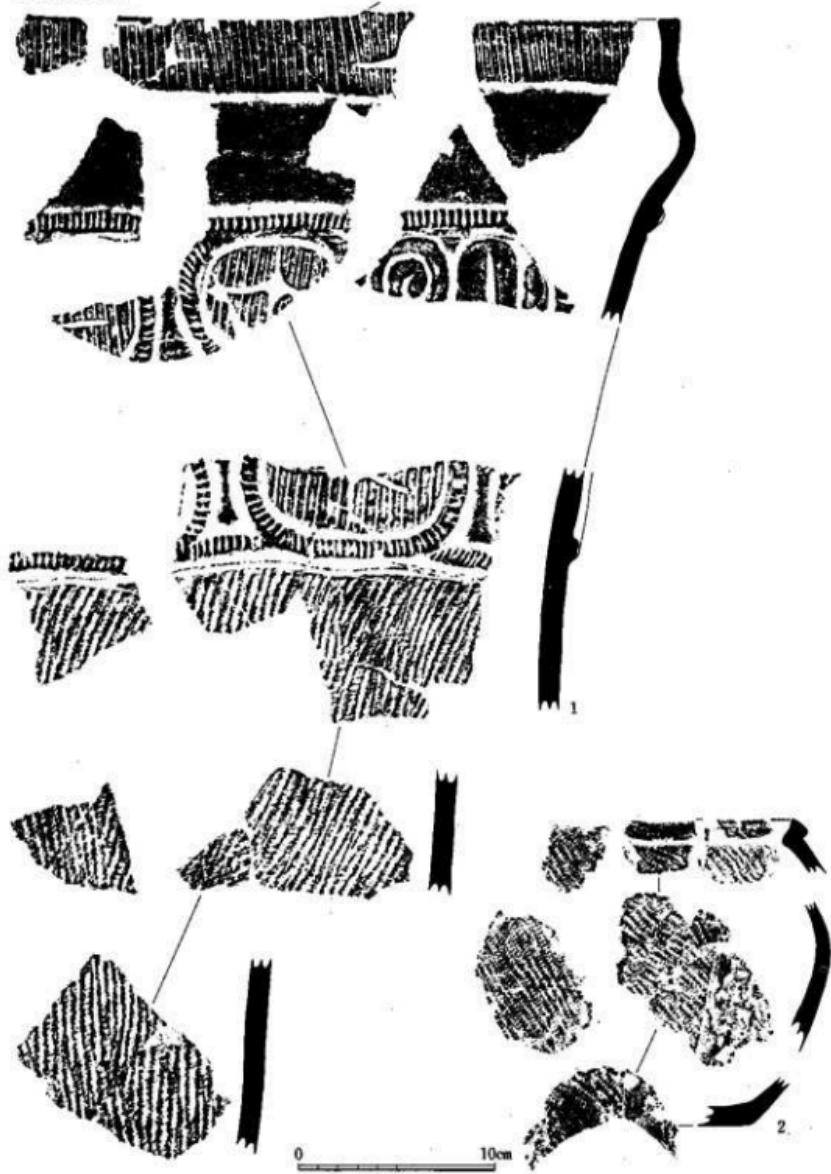
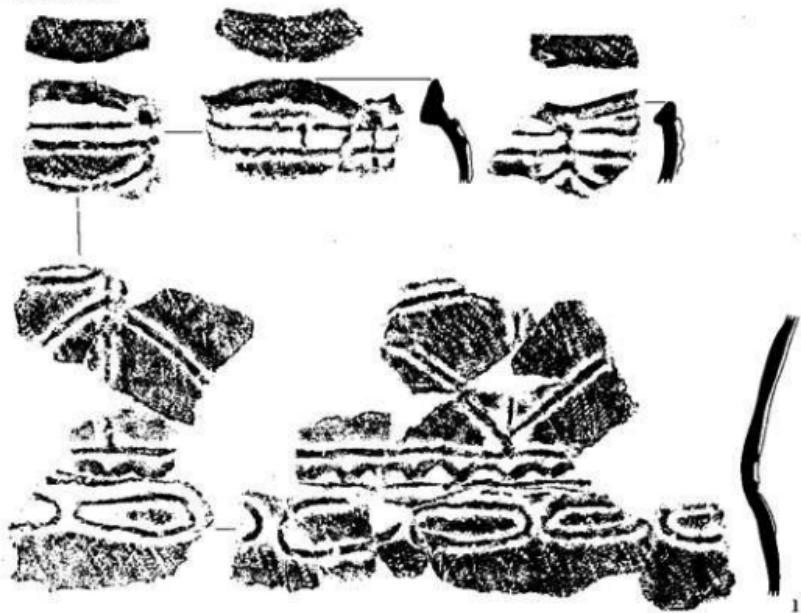


図17 270(2)号住居址出土土器拓影図

270号住居址(3)



271号住居址(1)

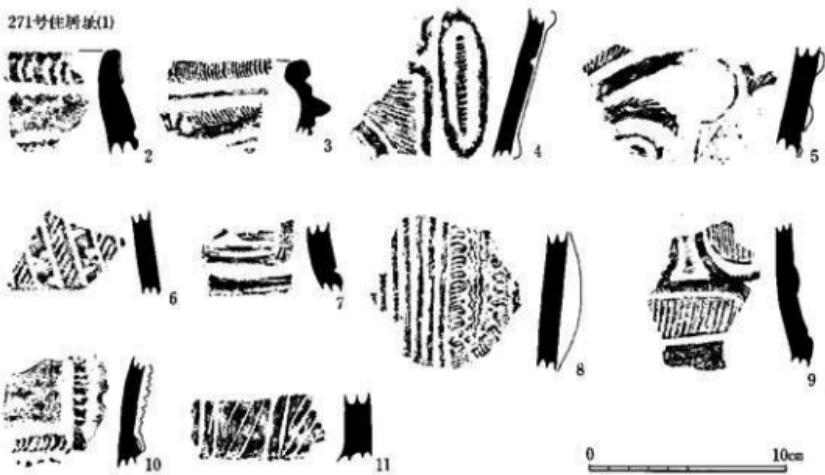
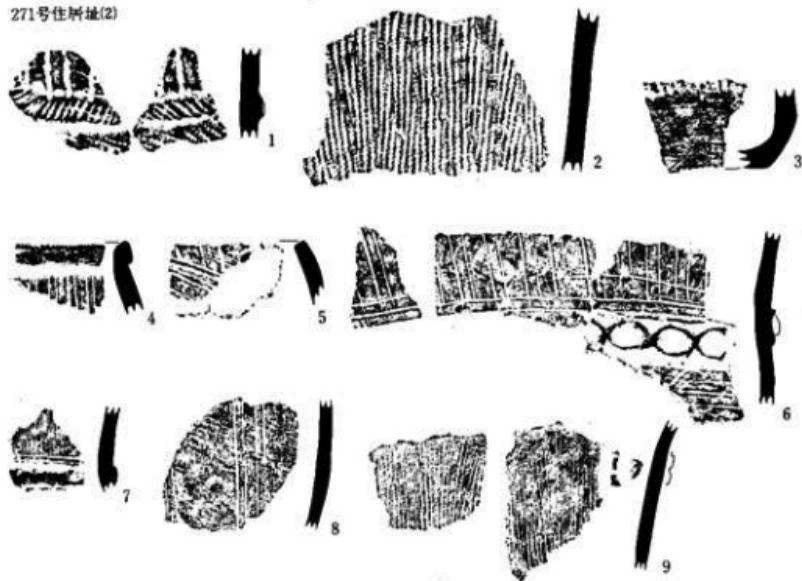


图18 270(3)·271号住居址出土上器拓影图

271号住居址(2)



272号住居址

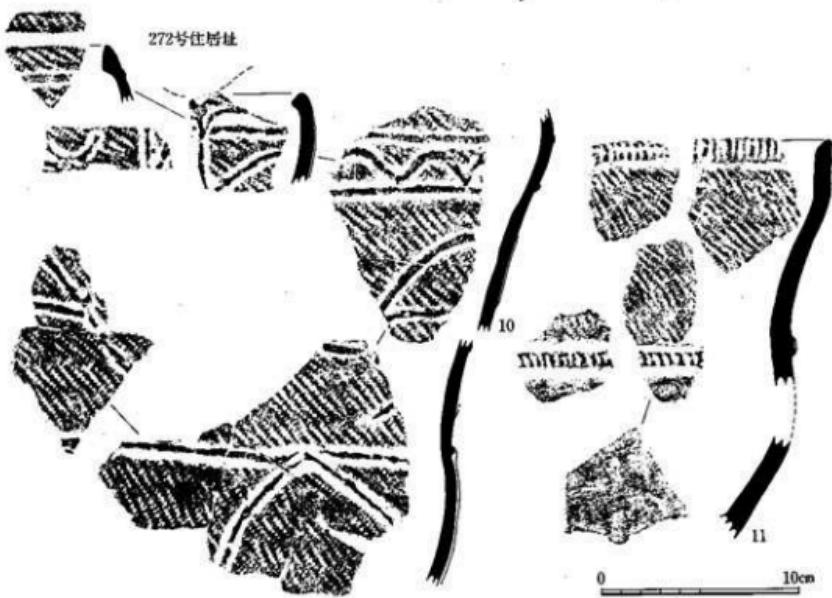


图19 271(2)·272号住居址出土上器拓影图

た。南西の壁外に等間隔に発見された4本の浅いピットは、上屋に関するものとすることもできる。

遺物が多い。土器は、底部を欠く有孔鋤付土器と略完成形土器4点（図版19-6～8）のほか復元できなかったがかなり大型の破片が多く遺棄されていた（図16・17・18-1）。時期的には、中葉IV期からV期にかけてのものとしていいだろう。特殊なものを二三あげると、有孔鋤付土器は、高さ20.5cmと小型で、算盤玉状に膨らむ体部はこの時期の特徴をよく表わしており、胸部に窓を大きく広げた生きものが、貼りつくようにして表現されている。背の部分が剥落してしまっているが、頭を環状の把手で表現しており、藤内遺跡の特殊遺構から出土したものに極めて類似している。また図18の1は、船元式に類似しており、中部高地の土器とは明らかに系統を異にする。石器は少なく、打製石斧2、粗大石匙1、横刃型石器3、礫石錐1と粗大剝片類5、黒曜石の剝片類4があるにすぎない。

中期中葉V期あたりに遺構の所属時期は求められようか。

⑩ 271号住居址

270号住居址の東、B E 37グリッドに検出されたが、東半は調査をする範囲から外れたため発掘していない（図15）。北西方向に軸線をおく丸みをもった隅丸方形の平面形を考えられる。検出面からの深さは20cmほどで、周溝はなく、床面は粘土質黄色土で貼ってある。 P_{12} と P_{16} は柱穴であろうが、 P_{15} は柱穴にふさわしい位置にあるものの、袋状で中位に黄色味の強い土が層をなして入っていることから、別の用途を持っていたようであり、柱の配置は、東半が調査された時明らかになろう。中央北西寄りにある石の入ったピットは、破壊された炉の痕跡である。

遺物は調査範囲からすると一定量出土しており、土器は後葉II期（図版19-9）が混入しているものの中葉IV期からV期が主体である（図18-2～11、19-1～9）。石器は打製石斧3、横

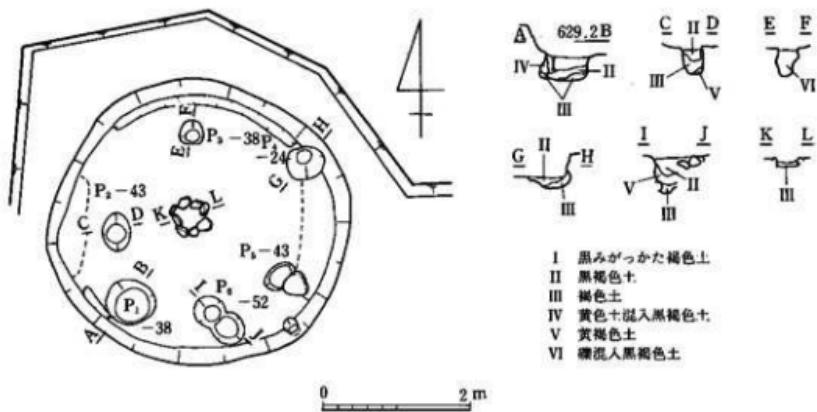


図20 272号住居址実測図

刀型石器2、磨製石斧・礫石錐・石鎌各1と、粗大剝片類4、黒曜石の剝片類13が出土している。

270号住居址とはほぼ同時期の住居址であろう。

(3) 272号住居址

B F36グリッドに検出された小型の住居址で、平面形は径4mの円形で、南東と北西に直線的な部分があると見てそれなくはない。検出面からは比較的深くて40cmほどあり、北側の壁下にのみ周溝が観察された。床面は粘土質黄色土によって貼られており、P₂の西に幅1.4m、高さ10cmほど、P₄とP₅の間で高さ5cmほど、いずれも床面が壁にむかってゆるやかに昇っていっている。柱穴はP₁～P₆の6本あるが配置としては整然としていない。炉は小ぶりの石を立てて組んだ石畳炉で、内部に焼土等は全く見られなかった。

遺物は極めて多い。土器（図版20-10-17、図19-10、11）には大破片が多く、図示しなかったがこれ以外にも多くの破片が出土している。中葉IV期からV期にかけての土器群だが270、271号住居址出土土器群よりも古い。図版20-16と図19-10は270号住居址例と同様、船元式に比定さ

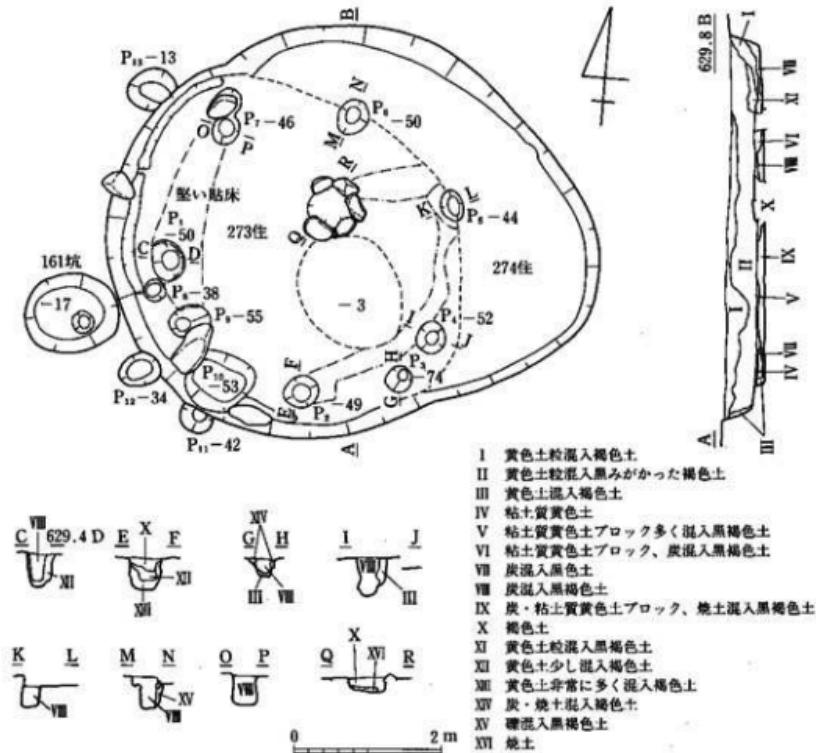


図21 273号住居址、161号土坑実測図

れよう。石器も多く、打製石斧12、粗大石匙1、横刃型石器9、磨製石斧2、礫石錐4、敲打器4と粗大剝片類11、黒曜石の剥片類6が出土している。埋土の遺物の中に、かなり細かく割れた顎面把手付土器の把手部があった。

(4) 273号住居址

B F35グリッドの南西隅に検出された住居址で、274号住居址から西北西方向にずれるものの大半が重なり、その埋土に貼り床して構築されている。土層観察によっても274号住居址と本址の埋土の区別ができるなかったため、274号住居址と重なる部分は床面が確認できる範囲としてしかとらえることができなかった。平面形は径5m程度の円に近い形が想定され、検出面からの深さは40cmを測る。埋土には、黄色土粒の混じる黒みがかった褐色土の上に、黄色土粒の混じる褐色土がレンズ状に入る様子が観察された。床面は、274号住居址と重ならない部分のP₇とP₉を結ぶ線から西と、P₂からP₄、P₅を通って炉までの帶状の部分の2箇所が2~4cm高く、全体に粘土質黄色土によって貼ってあり堅い。ただ、西壁下には貼り床していない軟らかい部分があり、柱穴の位置からも、北東側は床が確認できた範囲よりも住居址の掘り方は広い可能性がある。炉の南の床が、広く浅い皿状に3cm程窪んでいた。炉は円形の石開炉で西の縁石が1個抜けており、細長い石を組んである中で、1個だけ丸みをもった板状の石を平らに据えてある南西側が焚き口となろう。この炉は、本址が埋土を切っている274号住居址の炉と同じ位置にあり、後述するように出土遺物には、両者の間にかなりの時間差があるが、住居構築時に、古い住居の炉の位置を踏襲している

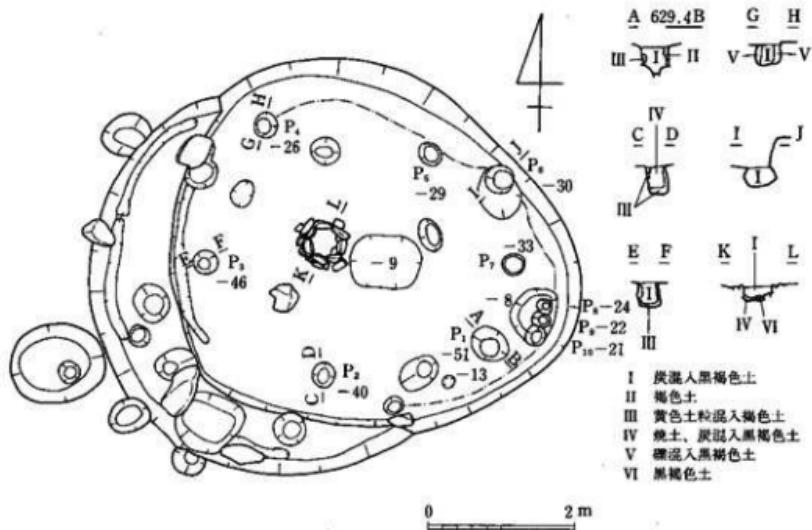


図22 274号住居址実測図

ように見える。柱穴はP₂、P₄～P₇とP₁もしくはP₉の6本柱が想定できる。

遺物は多い。土器は、274号住居址出土と換合する例を含む中葉のものもあるが、後葉Ⅰ期の人破片が目につく(図23、24-1～12)。石器には打製石斧8、粗大石匙2、横刃型石器4、磨製石斧4、敲打器8、叩石1、敲打製石器2、石鎌1と、粗大剝片類12、黒曜石の剝片類10があり、敲打器類が多い。このほか、中央南寄りの床より10cmほど上の埋土から、土偶の腕から上が出土した(図28-1、図版24)。顔面や頭髪の表現は顔面把手と極めて共通しているが、割れ口をみると棒状の粘土を脣部の粘土の上に貼りつけ両腕としていること、表面の整形の感じも土器とは異なっていること、両耳と頭頂部の貫通孔が小さいこと等から土偶の一部としておきたい。同様に顔面把手に酷似した土偶が過去の採集遺物の中にある。現存高は10.5cmを測る。

遺構の所属時期は、遺構の面からは274号住居址と連続性がうかがえるものの、遺物によって中期後葉Ⅰ期としておきたい。

(5) 274号住居址

273号住居址に埋土の大部分を掘られてしまった住居址で、平面形は西北西方向に軸線をおく東が尖った卵型を呈する(図24)。規模は5.6×5m、検出面からの深さは40cmを測る。埋土下層には炭の多く混じる黒色土が観察された。住居は疊混じりの層まで掘り込んでおり、全体に粘土質黄色土で貼ってあるが、壁際の幅20～40cmはそれが見られない。炉の東、住居のほぼ中央の床が細長い皿状に9cm程窪んでおり、西壁下にだけ周溝がある。炉は円形の石圓炉で小振りの石によつてほぼ二重に囲んである。柱穴はP₁～P₅、P₇の6本が住居址の軸線を軸として線対象に整然と配置されており、P₁とP₇の間の壁下には、浅い半月形のピットの中に、深さ20～25cmの小型のピットが3個穿たれていた。入口施設の痕跡であると解釈したい。それに向かって床が摺り鉢状に窪むP₆は、埋土の状態からも開口して使用されていた施設の可能性があろう。今回調査した中では、形態的に最も整った印象を受ける住居址である。

遺物量は少ないが、土器に良好な資料がある(図版21-18～21)。胴下半に「サンショウウオ文」を一对一付け、口縁に動物の頭を模した大型の突起1つと、縦に半切した茹卵の白身だけを連続して置き並べたような突起を付け回す18は、P₆の南西の床面に押しつぶされた状態に、21はP₇の西に床上10cmの高さに横たわった状態で潰れることなく、また20はP₇の東の床面にやや西に傾く正位の状態にあった。前者と同様な土器は272号住居址と160号土坑からもやはり胴下半部から底部を欠く完形の形で出土している。19は273号住居址と275号住居址の埋土にわたる広い範囲に散在していた。中葉Ⅲ期の土器群であり、全て住居廃絶後もたらされたものと判断される。石器は打製石斧2、横刃型石器・敲打器各1、磨製石斧3が出土している。

所属時期は、出土土器から中期中葉Ⅲ期としていいだろう。

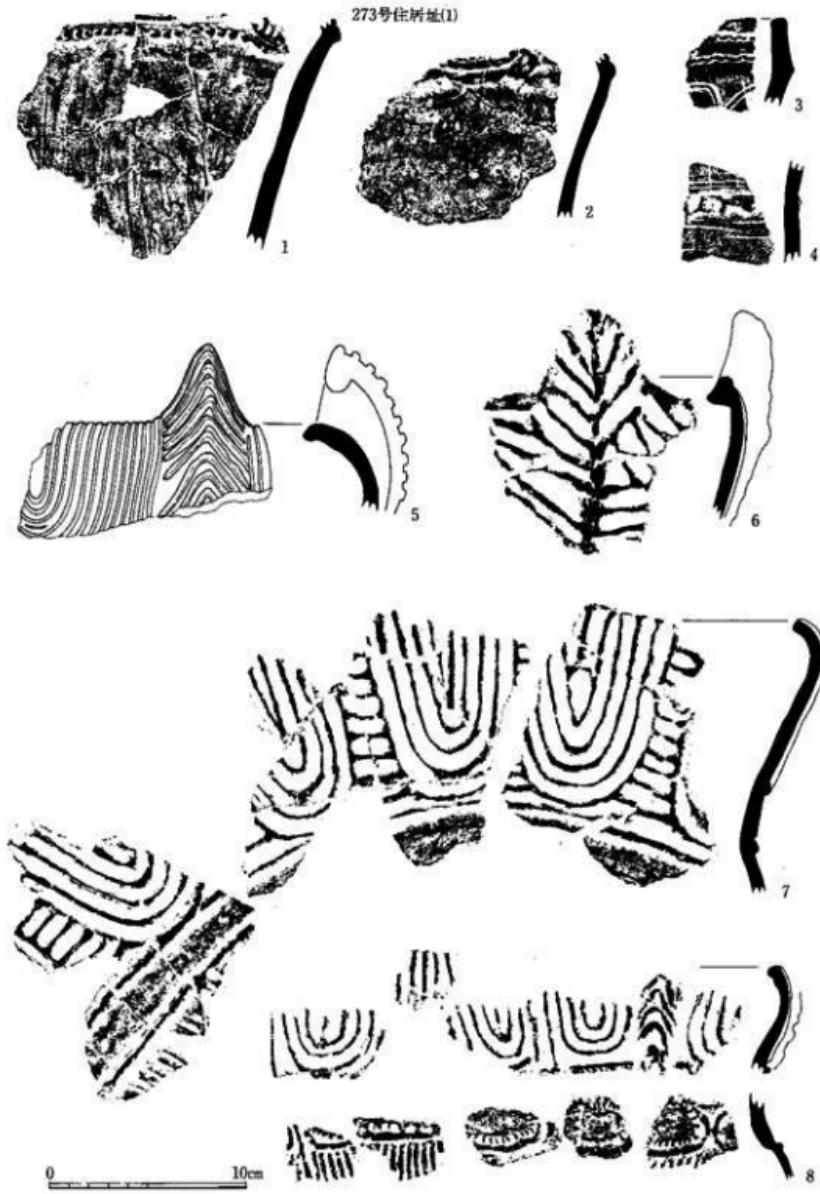


图23 273(1)号住居址出土土器拓影图

273号住居址(2)



275号住居址(1)

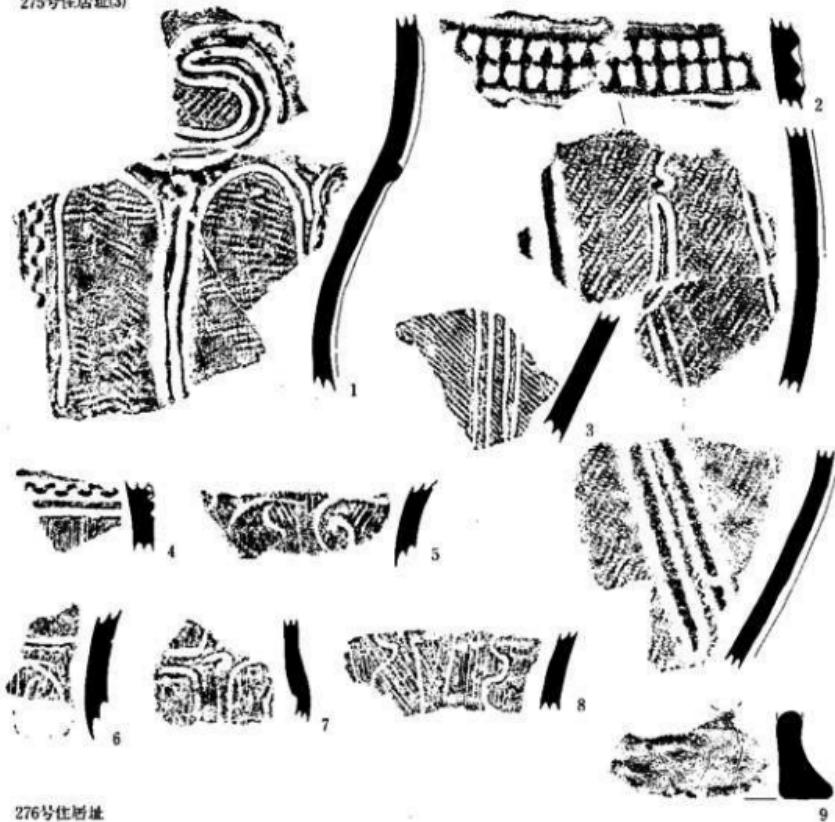


图24 273(2)·275(1)号住居址出土土器拓影图



图25 275(2)号住居址出土土器拓影图

275号住居址(3)



276号住居址

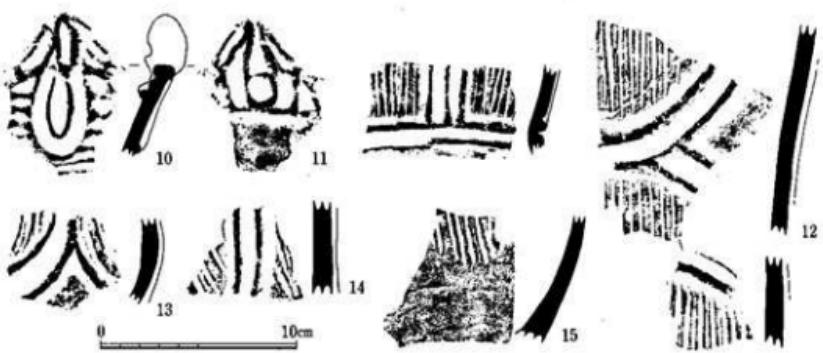


图26 275(3)·276号住居址出土土器拓影图

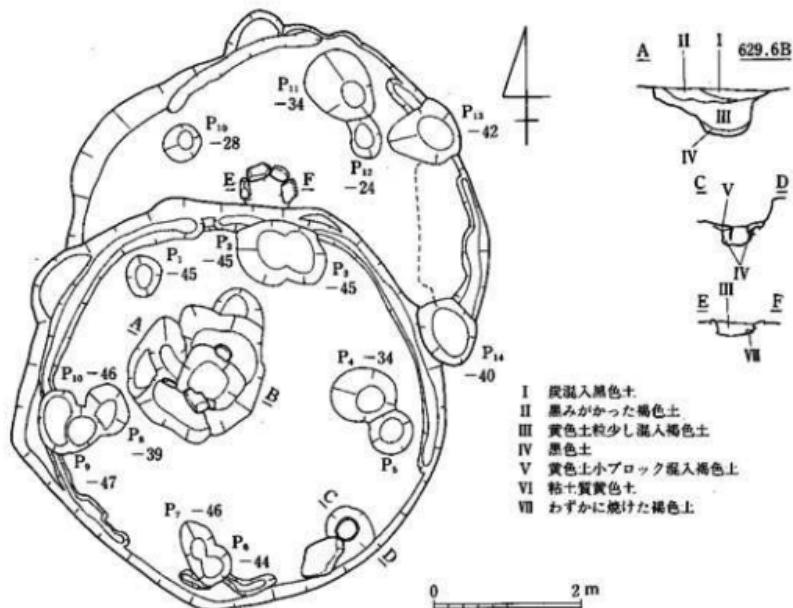


図27 275・276号住居址実測図

(6) 275号住居址

B E 35グリッドに検出された住居址で、276号住居址を切っている（図27）。平面形は南西壁だけははっきりと直線を描いて掘り込み、他の4辺を大きく丸みを持たせた五角形ともみれるが、いずれにせよ床面施設から導きだされる北西方向という軸線とは整合しない。検出面から床までは深く、50cmを測る。南側を除く壁下を巡る周溝は北西側が特に深く、その描く線は六角形と見えなくもない。床面は粘土質黄色土で貼ってある。柱穴はP₁、P₂P₃、P₄P₅、P₆P₇、P₈～P₁₀の5本を考えられるが、P₁だけ重複しておらず不自然であり、それを除く4本柱としておきたい。建て替えは3本重複が1箇所だけであることから1回以上とするにとどめる。南東壁下に埋甕があり、その周囲はゆるく窪み、北東の周溝までの間の床は、壁に向かってゆるやかに上がっている。炉は炉石がほとんど全て抜かれてしまっているが、痕跡から板状の石を立てて組んだ大きな掘炬燵状の石陣がが考えられ、底にははっきりとした黑色土が残っていた。

遺物は多いが、埋甕（図版21-22）以外は率的にも破片が多く（図24-13-16、図25、図26-1～9）、後葉I期をわずかに含みながら、ほとんどが後葉II期ということになる。石器は打製石斧16、横刃型石器9、磨製石斧5、敲打石・叩石各1と、粗大剝片類37、黒曜石の剝片類42が出土しており、粗形刃器とそれに由来する剝片類、黒曜石の剝片類が多い点、他の住居址と異なる。所属時期は中期後葉II期である。

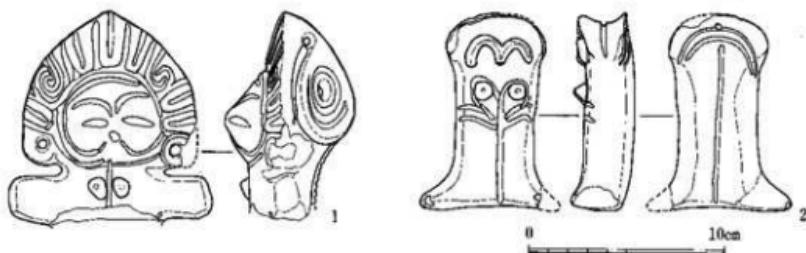


図28 273・276号住居址出土土偶実測図

(ii) 276号住居址

B E35グリッドに検出され、275号住居址に南半を切られている（図27）。また東側は床面まで擾乱されていたが、その下に周溝が発見されプランを決定することができた。しかし、平面形は径5m程度の円に近いとしかいえない。検出面からの深さは35cmほどで、西壁はゆるく立ち上がる。北と東の周溝は部分的で、床は粘土質黄色土で貼ってある。柱穴は、P₁₁P₁₃P₁₄と275号住居址構築時に切られた部分に1本の、4本柱が考えられる。炉は棒状の石を組んだ円形の石囲炉で、やはり南側は切り取られてしまっていた。

遺物は少ない。小量の土器の所属時期は単純で（図26-9～14）、後葉Ⅰ期に限られる。石器は打製石斧6、横刃型石器2、砾石錐2、石錐1が出土している。ただ、特記すべき遺物として完成形の土偶がある（図28-2、図版24）。P₁₂の北の壁下の床面から頭を壁の方に向かって、右の体側を下にして出土したもので、板状土偶の一例である。高さ9.8cmで左の足先をわずか欠く。板状の粘土に頭髪部と乳房、足先、それに鼻から目を表現した粘土紐を貼りつけただけで、後頭部に小孔を1つ穿ってある。横位に形成されていた割れ口の観察によれば、体部は角柱状の粘土塊に厚さ7mmの粘土板を巻き付けて成形しており、右体側で巻き納めている。遺構に密接な関係をもつ遺物として貴重である。

住居址の所属時期は中期後葉Ⅰ期としていい。

2 竪穴

竪穴の実測図は、住居址内やそれに近接して検出されたものはそれぞれに掲載してあるので図4、7、9、と次ページの図28によられたい。今回の調査で検出された23基の竪穴をあえて形態に注意して分ければ、大型で深い31・32・36・39・44・45号竪穴、小型だが深さもあり平面形が円を描く28・30・40・41・42・46号竪穴を抽出することが可能で、遺物の出土状態からは、多くの土器が破片で入り込んでいた例として36・39・44号竪穴、完成土器が入っていた例として29・44・45・47号竪穴を上げることができる。特殊な埋土の例では、36号竪穴の底から10cm上の中央部のみに観察された赤みがかった褐色土の層、46号竪穴の埋土上層の厚い砂質黄色土とその下の中央だけにあった黄色土の混じる黒色土、中位に完成の土器がありながら炭の混入する褐色土一

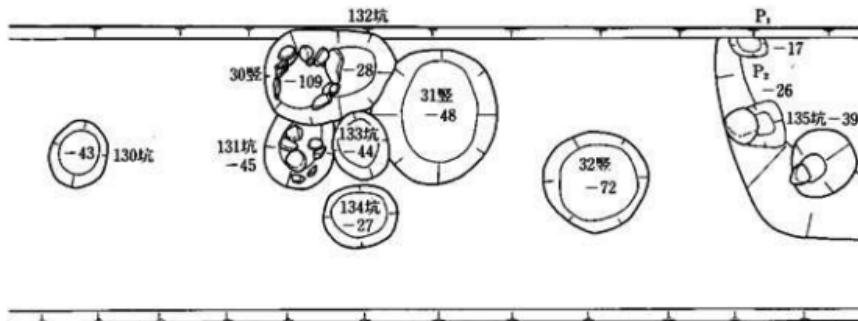


図29 30~35号竖穴、

色だった45号竖穴、さらには、太い木柱状のものが立てられていたとしても可能であろう、周囲に人頭大からその2倍大の石を詰めたかのような状態が観察された30号竖穴内部などを上げることができる。以下出土遺物に注目し、時期別に記述していきたい。

(1) 中期後葉Ⅰ期の竖穴

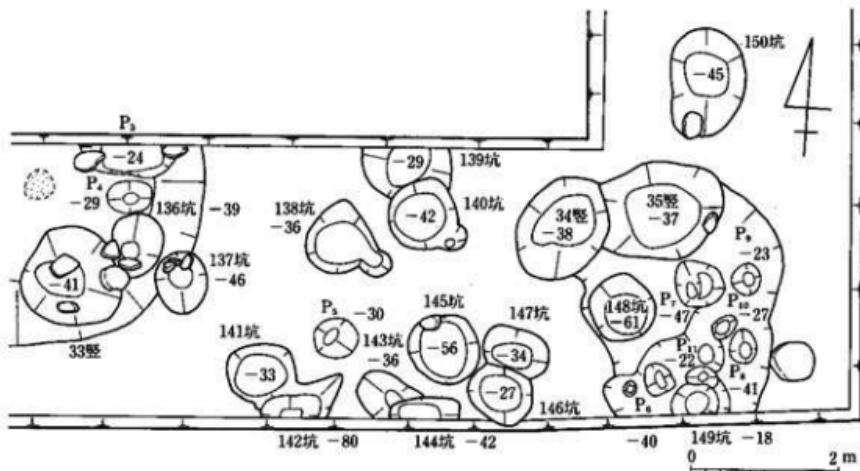
28・40・41・43・47号竖穴の5基を数えることができる。ただ、28・47号竖穴以外は同じ時期の住居址内もしくはそれに接した位置にあり、小量の遺物から時期を決定しており、Ⅰ期以降の遺構といえる程度である。底部の西端に角礫を置き並べ、東側にⅠ期の完形土器を埋置してある47号竖穴は、貼り床されていない底面の土質から、262号住居址を切ると判断したが、住居址に付属する施設である可能性は否定できない。いずれにせよ、特異な遺構である。竖穴の規模が小振りであるのもこの時期の特徴である。

(2) 中期後葉Ⅱ期の竖穴

25~27・29・32・36~39・42号竖穴の10基が相当し、数としては最も多い。しかし、Ⅲ期の竖穴群に隣接した32号と、Ⅰ期の住居址を切る36~38号竖穴以外は、近接する住居址と時期的な隔りはない。明らかに後葉Ⅲ~Ⅳ期の44・45号竖穴でも後葉Ⅰ~Ⅱ期の破片が一定量出土しており(図36~38)、Ⅱ期以降の遺構群といえる程度である。25~27・29号竖穴は住居址付属施設の可能性も残している。29号竖穴からは台部を欠く小型土器が出土している(図版21~23)。

(3) 中期後葉Ⅲ~Ⅳ期の竖穴

30・31・34・35・44・45号竖穴の6基があり、調査範囲に住居が営まれなくなった時期の竖穴である。30・31、34・35、44・45号竖穴の3群に分けられる。30・31号竖穴は、出土した遺物から隣接する131~134号土坑と一群をなす。先述したように30号竖穴内には後詰め状の石が入って



130~150号土坑実測図

おり、全体で何らかの造構であった可能性もある。44・45号竪穴からは、完形土器が出土している。前者からは1個体、後者からはなんと7個体である。44号竪穴の土器(図版23~31)は西に貼りつくような形で潰れて出土し、45号竪穴の土器(図版22、図版23~29・30)は、底から20~30cm浮いた位置に潰れないで多くが横たわるような状態で出土した。西原区画整理事業区域の南東端での宅地部分の調査(B C 53グリッド地点)でやはりこの時期の竪穴群を検出しておらず、中越遺跡では2例目の発見となる。(2)でふれた遺物出土状況から、完形土器のみを入れ、埋め立るといった行為が想定できる。従って、付近の整った形の竪穴もIII~IV期に穿たれた可能性がある。規模の大きな竪穴が全てこの時期に含まれていることも注意したい。

3 土坑

38基の土坑は、用地南東と北東の隅、それに30、31号竪穴の周囲の3箇所に集中している。やはり、図28に示した以外は、住居址の図中に実測図は掲載してある。以下、一定量の遺物が出土している土坑を時期別に分けて記述するが、時期を特定できるのは20基ほどである。

(1) 中期中葉の土坑

128・135・136・150・160・163号土坑から一定量の遺物が出土している。後葉の集落域で発見された以外の、中葉の集落域から検出された160・163号土坑からも、中葉の土器が有意な出土状態で発見されており、すべて中期中葉の土坑としたい。270号住居址の北に接する160号土坑からは、中葉III期の、サンショウウオ文を付した、底部を欠く深鉢(図版23~32)がつぶれた状態で出土した。中葉の土坑に伴う土器が横位につぶれた状態にあった点、注意したい。135・136号土坑一帯が円形に溝んでいるが、中央に焼土があり、廃絶後、床材である粘土質黄色土を再利用す

るため破壊された、住居址の痕跡であるのかもしれない。(住居廃絶後、床部分を掘り去ったかのような痕跡は、平成5年度の個人住宅建設に伴う中越遺跡内での調査で2例みつかっており、礫の多い遺跡地では、合理的な行為であったのかもしれない)

(2) 中期後葉Ⅰ期の土坑

145・146・148・153・155・162号土坑と、3箇所の土坑から後葉Ⅰ期の土器が多く出土している。153・155・162号土坑は同時期の住居址と重なる。用地南東隅の土坑群は、竪穴を除きこの時期のものであって、同位置のピット群の中には、柱穴様にしっかりととした掘り込みがなされているものがある。それらと合わせて一つの遺構である可能性が高く、あるいは135・136号土坑付近と同様、破壊された住居址であるのかもしれない。

(3) 中期後葉Ⅱ期の土坑

127・142・143・156号土坑をあげることができる。127号土坑以外は住居址に関係なく掘られた遺構である。遺物の量は少ない。

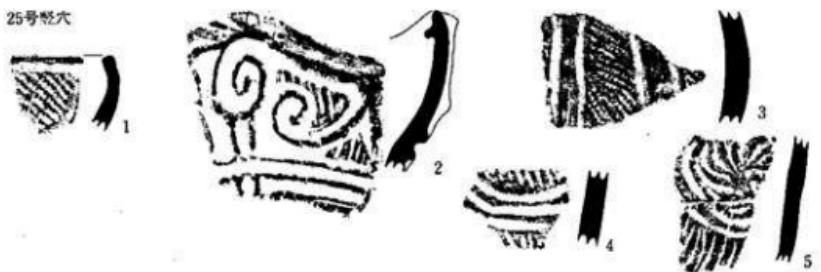
(4) 中期後葉Ⅲ～Ⅳ期の土坑

126・131・132・134号土坑の4基で、126号土坑以外は30・31号竪穴と一群をなす。126号土坑内には人頭大の礫が多く入っていた。

4 土器捨て場

調査地区の北縁の北への傾斜面から多量の遺物が出土した。深さ15cmの整理箱15箱分で、今回出土した遺物量の3割を占める。地形から、また過去の地形を知る人の話から、さらに付近の道路の発掘調査の結果からも、用地の北に東からやや南の方向に向かい、BA50グリッド付近で台地から落ちる深い溝が存在したことがわかつており、用地北の傾斜面はその溝へと続いているものである。包含層の下に遺構が全くなく、多量の遺物が出土したのは、その溝を土器捨て場として利用した結果であると判断した。破損した土器を捨て始めるのは、出土した遺物の所属時期から、調査した範囲では中期中葉の後半からで、中期後葉のII期ころには終了しているようである。全体としては集落の継続期間を出るものではないが、量的には中葉VI期から後葉Ⅰ期、中でも後葉Ⅰ期が圧倒的に多く、過去の調査結果を合わせるとこの付近の集落が後葉Ⅱ期が最も濃密に分布するという集落密度の変化と、遺棄量の変化は必ずしも一致しない。今回調査した範囲の、後葉Ⅰ期の住居址埋土からの遺物出土量が少ないが、その理由一つにこの土器捨て場の存在を上げることも可能で、集落構成員の集落内での行動が、中期の全期を通じて一定ではなかったことを示す事例として注意したい。

25号竖穴



26号竖穴



27号竖穴

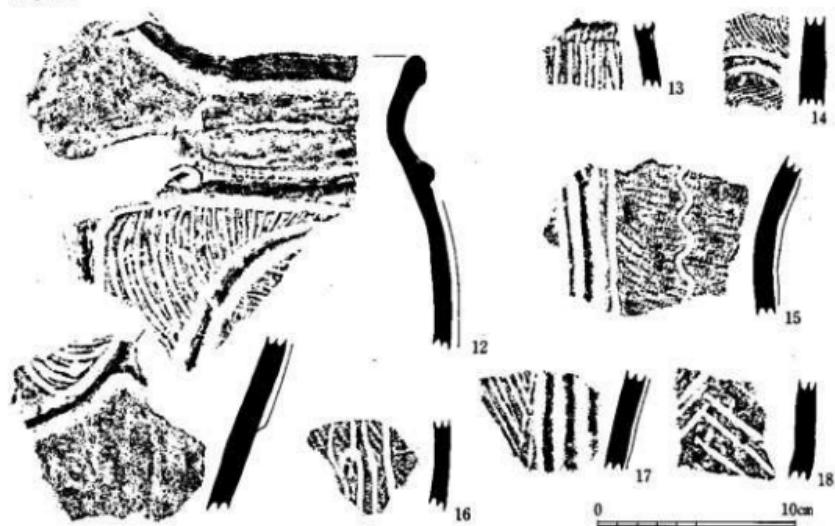
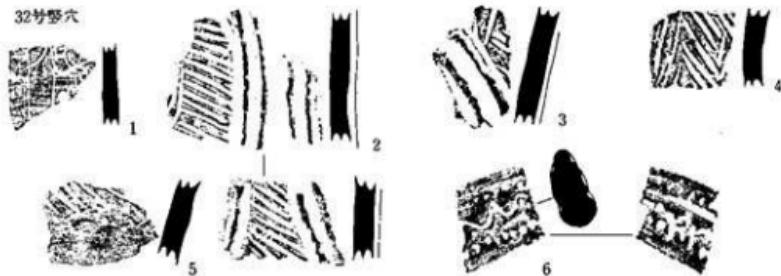


图30 25·26·27号竖穴出土土器拓影图



图31 28~31号竖穴出土土器摄影图

32号竖穴



34号竖穴



35号竖穴



37号竖穴

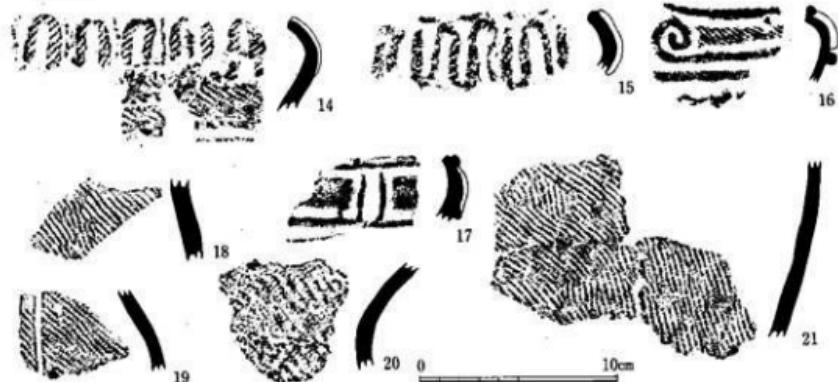


圖32 32·34·35·37號竖穴出土土器攝影圖

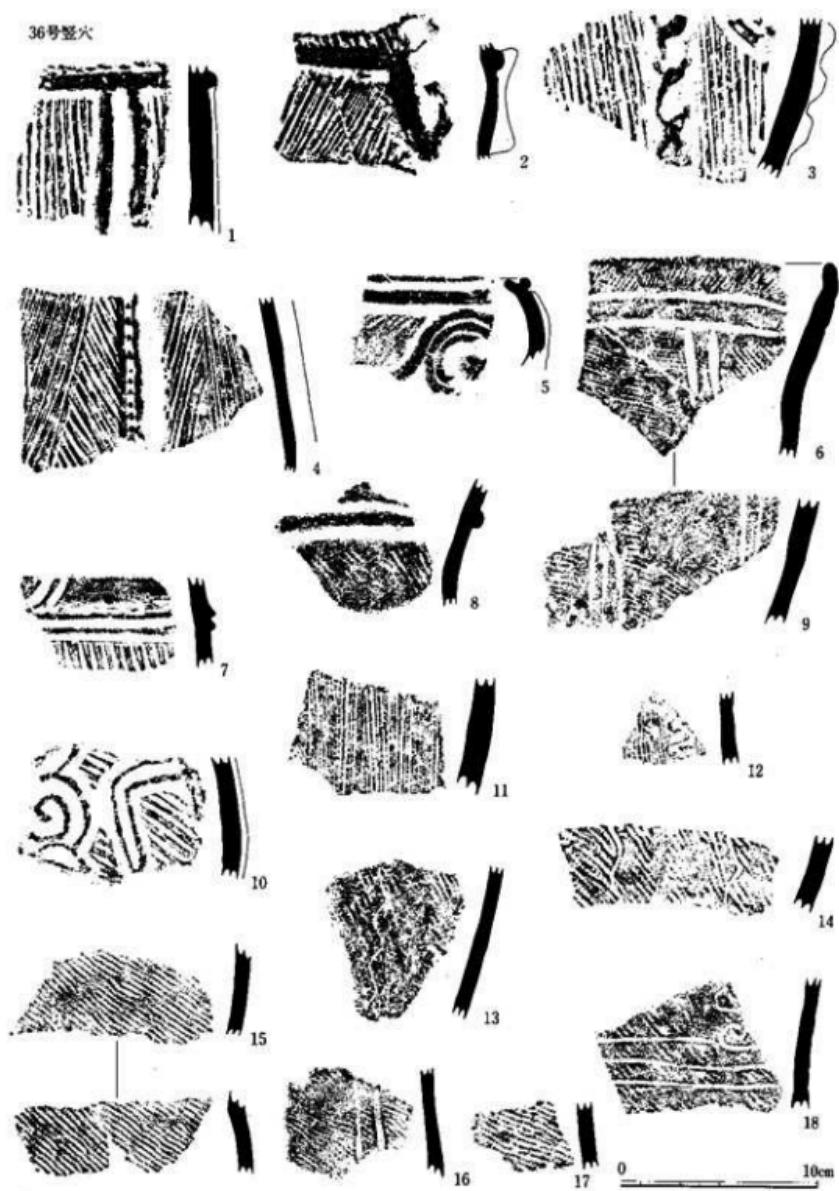


图33 36号竖穴出土七器拓影图

38号竖穴



39号竖穴(1)

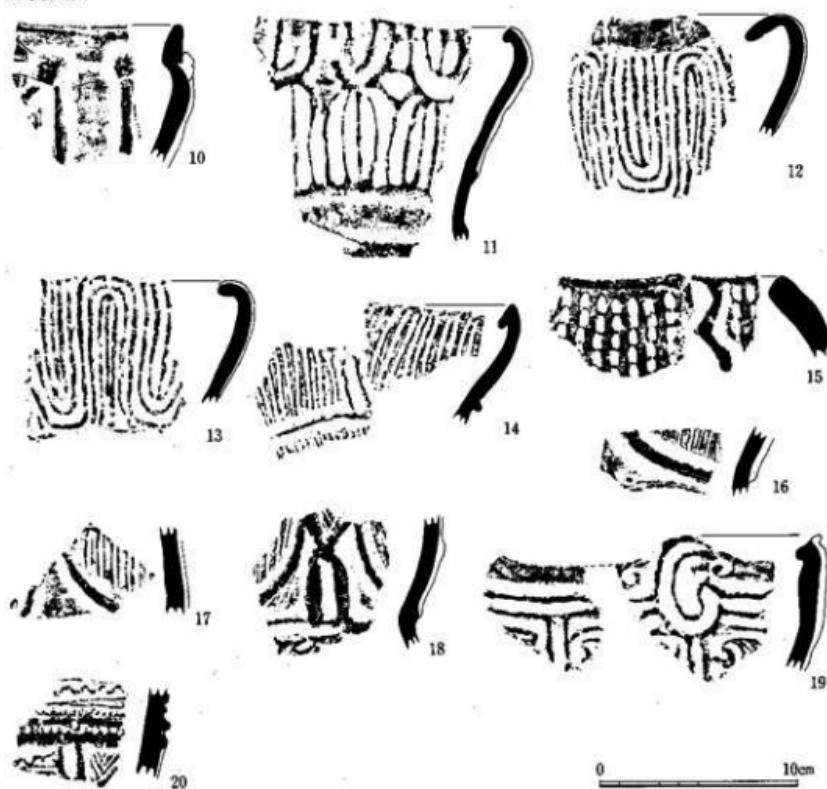


图34 38·39(1)号竖穴出土土器拓影图

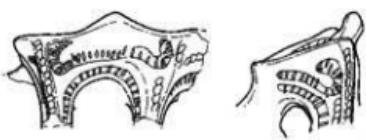


图35 39(2)号竖穴出土土器拓影图

40号竖穴



41号竖穴



10

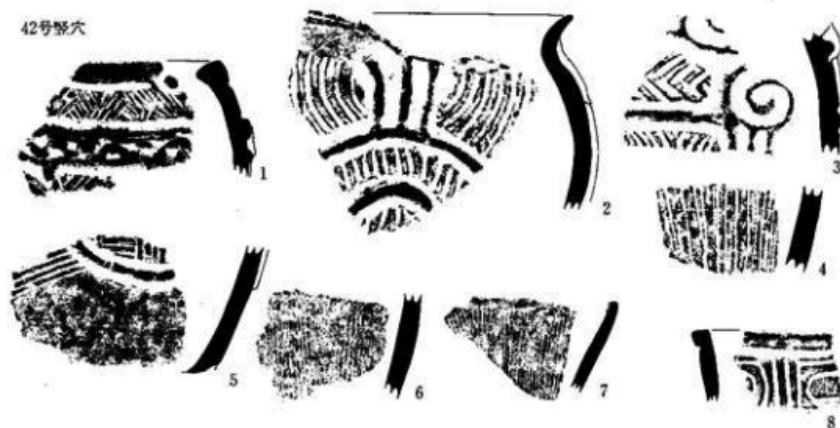
12

13

0 10cm

图36 40·41号竖穴出土土器拓影图

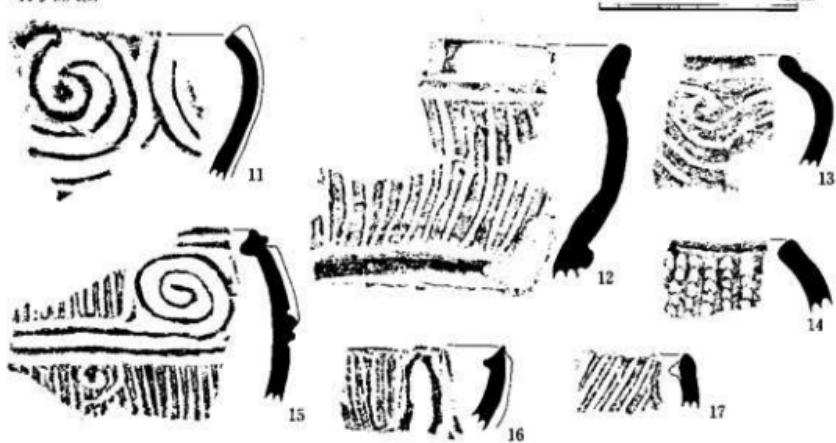
42号竖穴



43号竖穴



44号竖穴(1)



0 10cm

图37 42·43·44(1)号竖穴出土土器拓影图

44号竖穴(2)

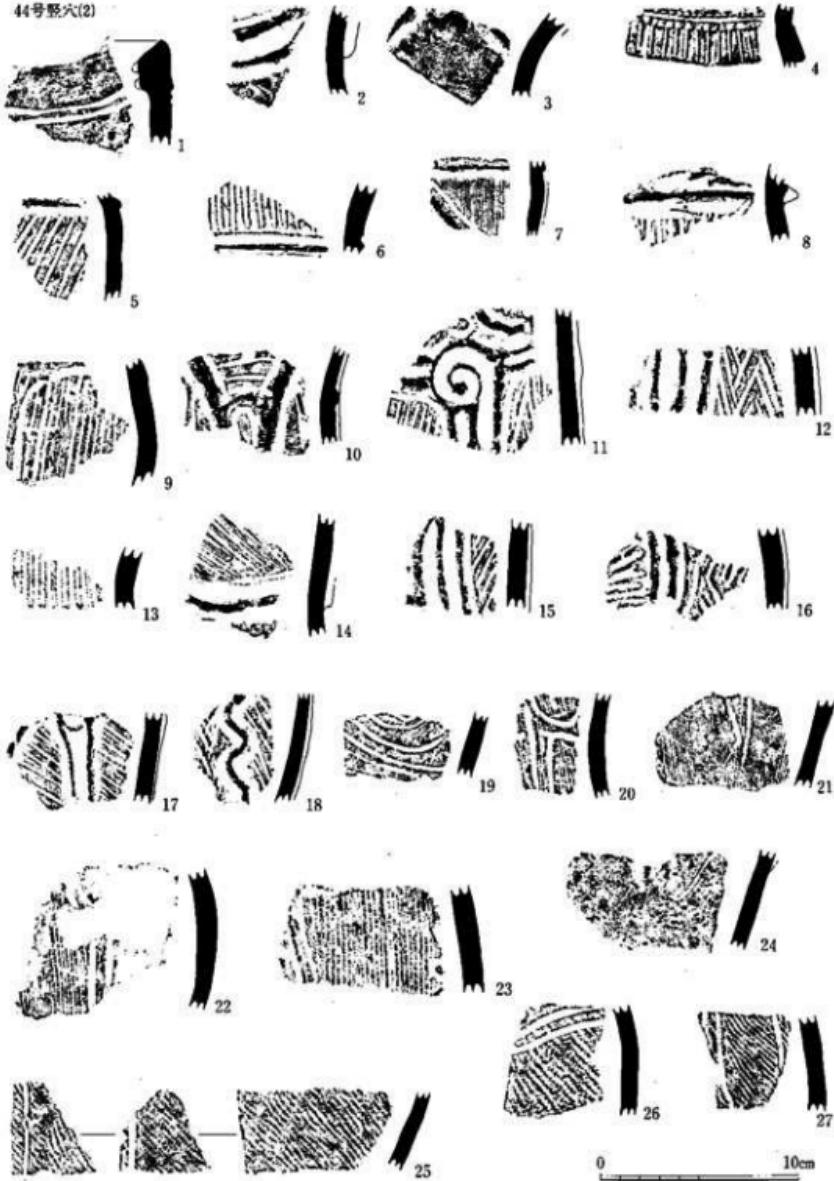


图38 44(2)号竖穴出土上器拓影图

45号竖穴

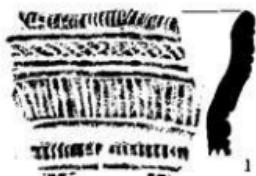


46号竖穴



图39 45·46号竖穴出土土器拓影图

140号土坑



135号土坑



155号土坑

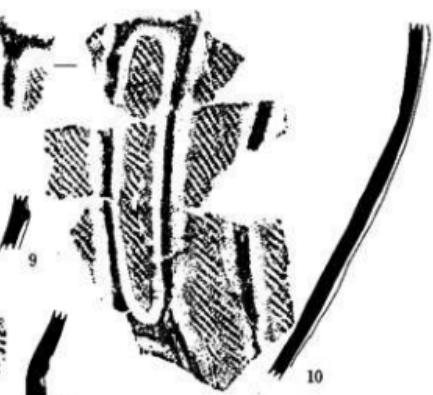
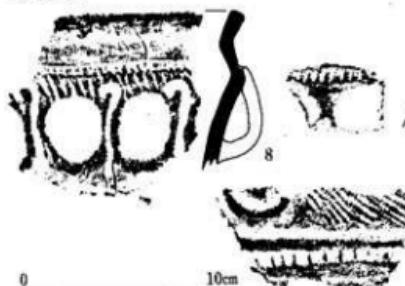


144号土坑



6

131号土坑



11

0 10cm

图40 土坑出土器物拓影图

第3章 まとめ

当初、縄文中期の集落域である今回の調査地点からは、それほど多くの遺構は検出されないだろうと考えていた。というのも、西方での道路部分の調査や、公園用地の北東隅での消防防火水槽埋設に伴う調査では、この東西に走る溝のすぐ南は狭い尾根状となり、そこでは遺構は発見されておらず、今回も、調査区域の北半くらいは遺構等の構築はないだろうと予想されたからである。実際に発掘してみると、その尾根は275号住居址の南西あたりまで伸びてきて消え、あとは東へゆるく傾斜する平坦面となっており、その平坦面全体に、縄文中期の集落が広がっていたのである。

(1) 集落域の変遷

今日までの調査で、遺物の出土分布から、縄文中期の集落は次第に台地南縁へと収斂するという傾向が指摘されていたが、今回の調査でも、中期中葉の住居址が最も台地内側に検出され、後葉Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期と下るに従って台地縁である南の方へ集落の北限が移動する様子がうかがえる。そのような変化の中で、土器廃棄の場にも変遷があったことが明らかとなった。すなわち、中期中葉末ころから後葉Ⅱ期まで、中でも後葉Ⅰ期をピークに、廃絶した住居の跡の凹地にかわって、用地北側の東西に走る溝が、土器廃棄の場として利用されるのである（当初、住居址があまり深く掘られていないためと考えていた後葉Ⅰ期の住居址内からの遺物出土量の少なさは、実はこの破損土器廃棄の場所の変化に起因する現象として理解できる）。後葉Ⅱ期以降の住居址埋土からは、再び多くの遺物が出土するようになる。

(2) 中期後葉Ⅲ期からⅣ期の竪穴

住居址とは別に、大型で深い竪穴が構築されている。完形の土器が出土しているが全てからではない。なかでも45号竪穴から出土した7個体の土器は、押し潰された状態ないことから明らかに人為的に埋め置かれたものであり、竪穴の性格をも示す遺物といえるが、完形土器を入れられた理由は、解明しなければならない今後の課題である。

(3) 中期後葉Ⅰ期の土偶

276号住居址から出土した土偶は、形態にも、またその出土状態にも注意しなければならない点がある。板状の土偶は縄文時代を通して通有の形態といわれているが、極端に部分を省略したこの土偶の形には、単なる省略以外の意味が込められているような気がしてならない。出土状態では、住居址の壁下という出土位置が注意されよう。頭を壁の方向に向け、右の体側を下にした出土状態は、壁近くの高いところから転げ落ちたとの印象も受ける。いずれにせよ、依り代的なもの以外の用いられ方が想定される。時期は違うが、同じ中越遺跡の縄文前期の家の床から発見された岩偶に似た性格のものかもしれない。

写真図版



調査区全景



調査区俯瞰写真（南東上空より）



調査区俯瞰写真（東上空より）



調査前の状況（北東より）



調査前の状況（西より）



258～260号住居址、25～29号竪穴、126～129号土坑（北より）



同上（西より）



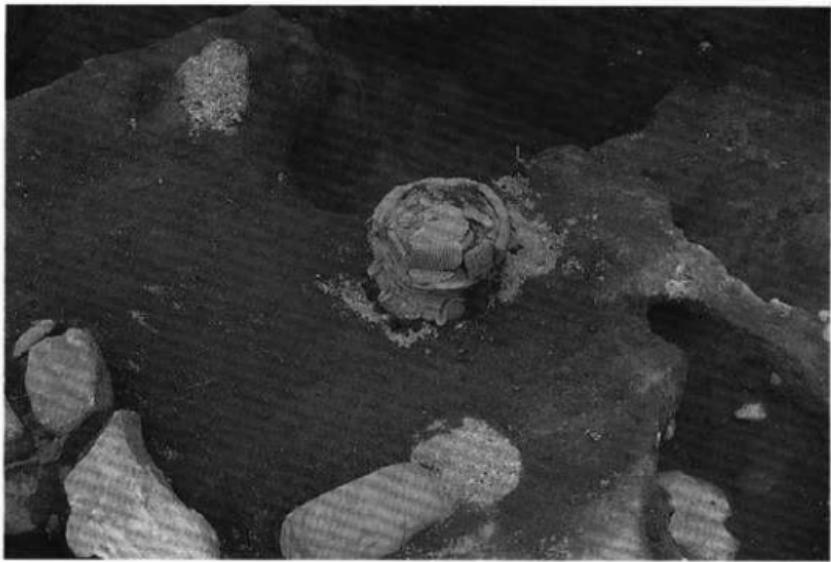
261号住居址（西より）



261号住居址炉



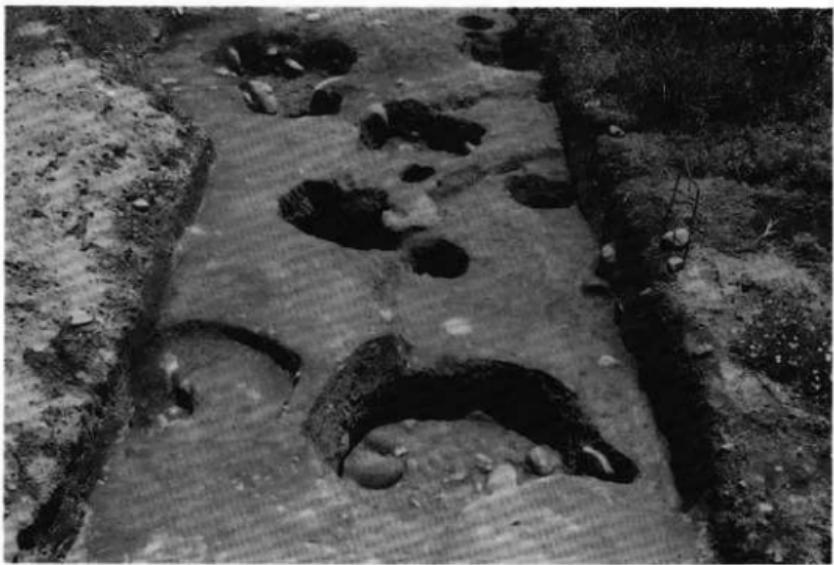
262号住居址、36~38、47号竪穴、151~159号土坑



47号竪穴内土器



265～267号住居址と39～44号竪穴（北より）



同上（西より）



267号住居址、39・40・45・46号竪穴（南より）



267号住居址炉



268号住居址（北より）



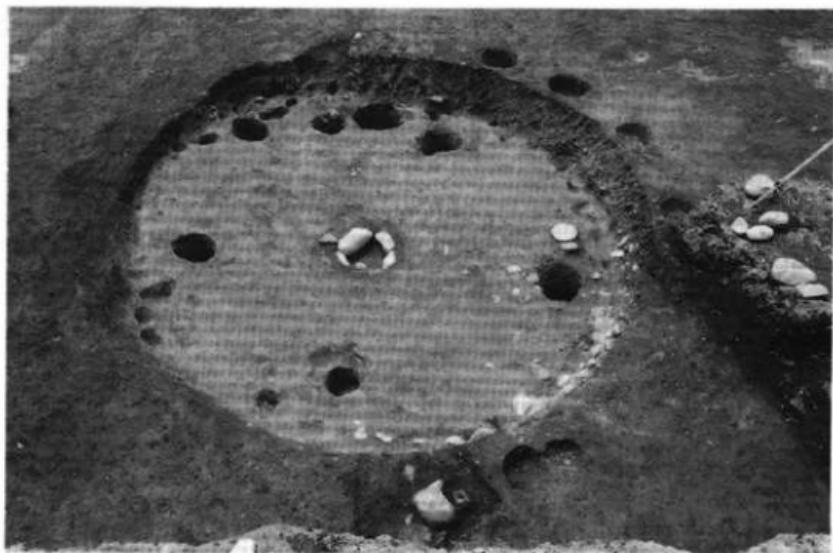
268号住居址炉



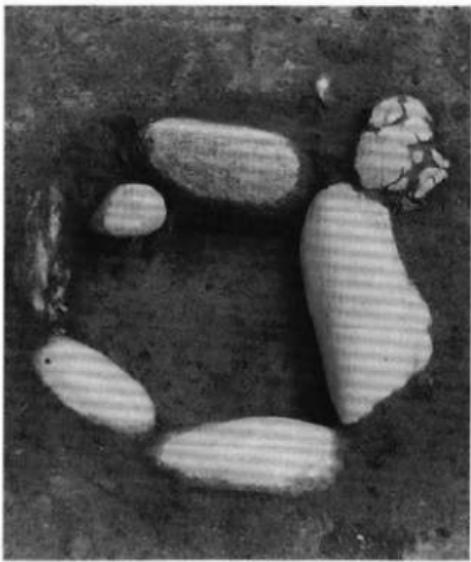
269号住居址 (北より)



269号住居址炉



270号住居址（北より）



270号住居址炉と遺物出土状態



270(左)、271(中央)号住居址(南より)



271号住居址炉跡と袋状ピット



272号住居址（南東より）



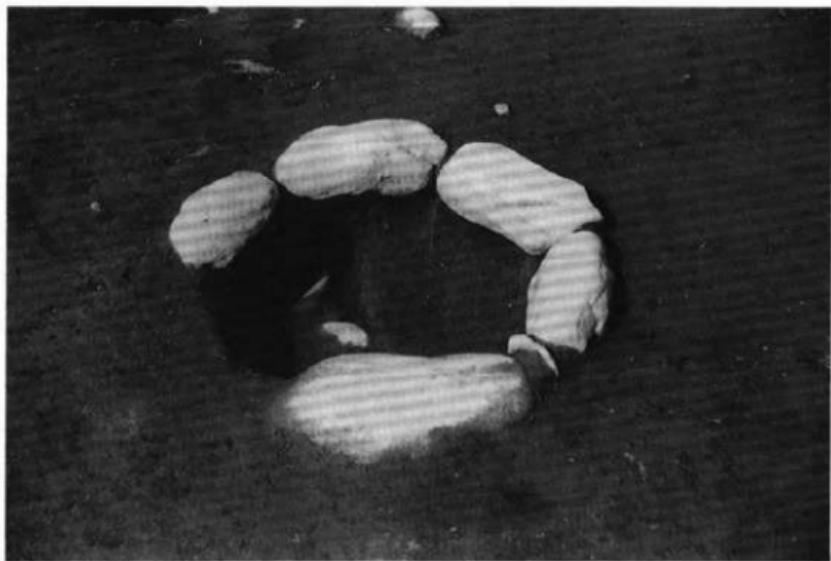
272号住居址炉と遺物出土状態



273号住居址（南東より）



273号住居址貼り床と274号住居址



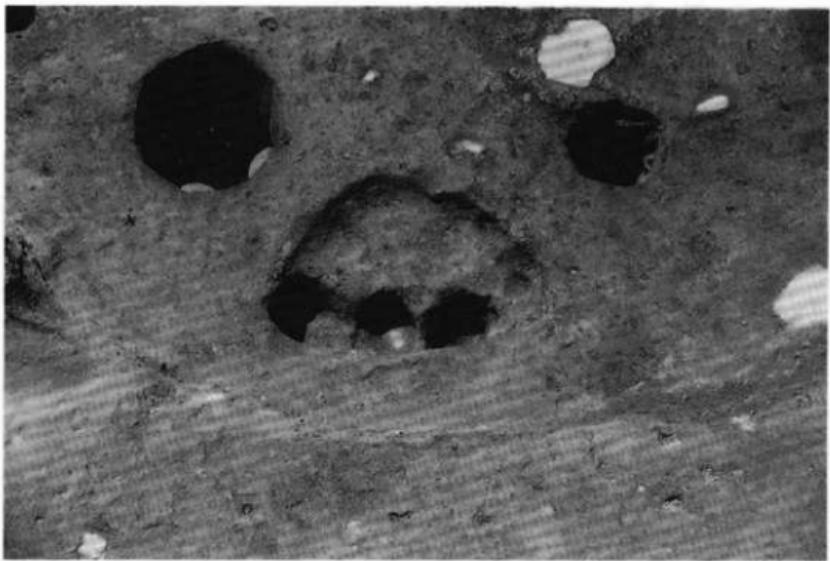
273号住居址炉



274号住居址炉



274号住居址（東より）



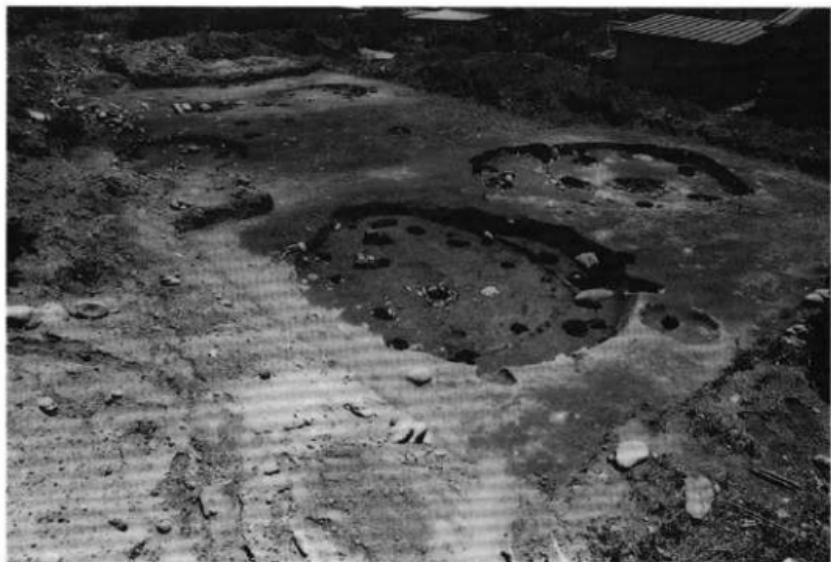
274号住居址入口施設



275(左) 276(右) 号住居址(北西より)



275号住居址埋甃



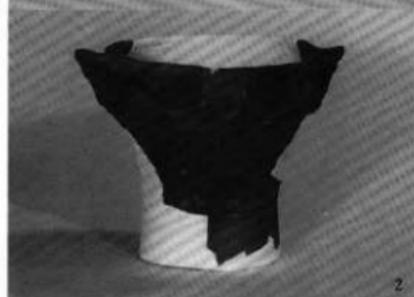
270～276号住居址（北西より）



同上（東より）



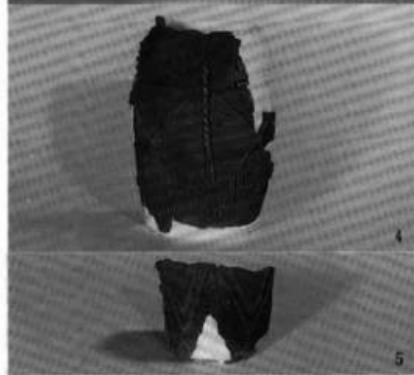
1



2



3



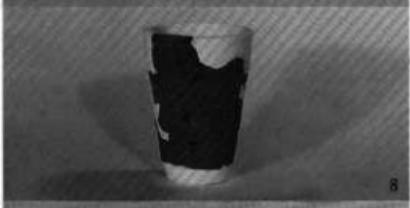
4



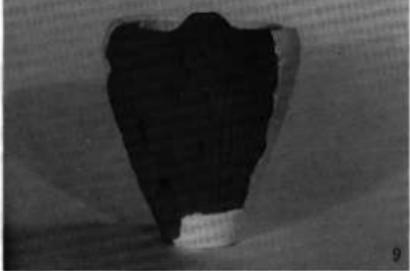
5



6

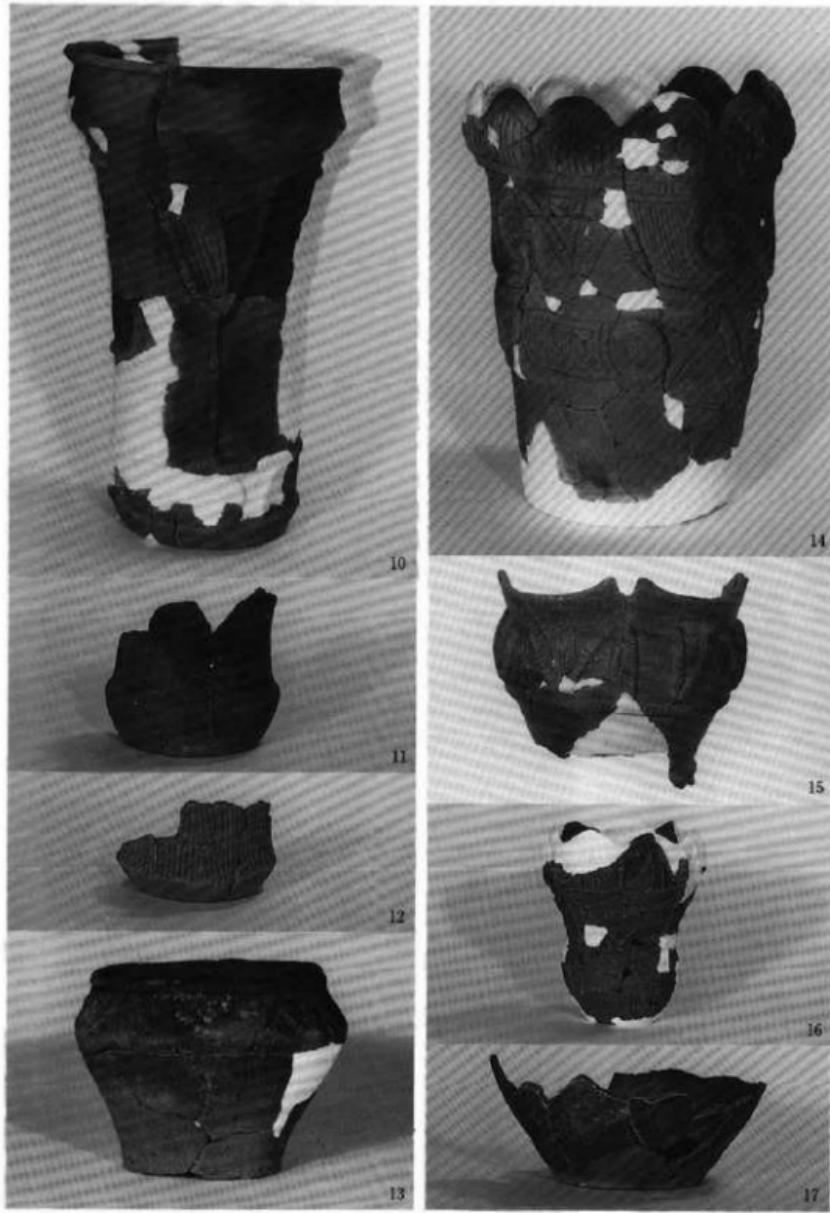


7



8

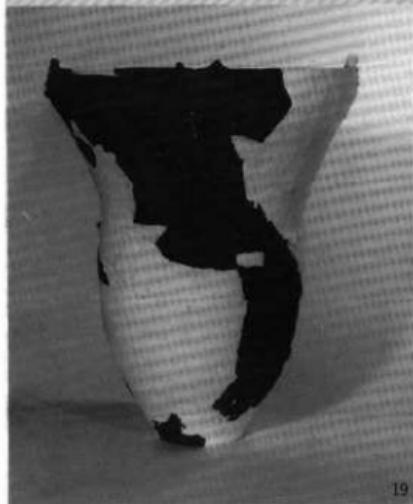
1. 259住 2. 261住 3. 262住 4. 267住 5. 267住炉 6~8. 270住 9. 271住



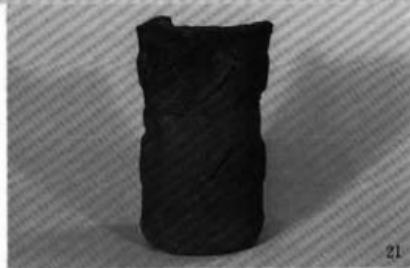
10~17. 272住



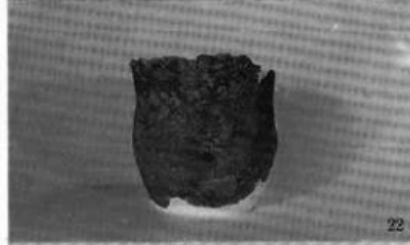
18



19



21



22



20



23

18~21. 274住 22. 275住 23. 29堅



25



26



27



28

24. 45号土器群 25~28. 45号



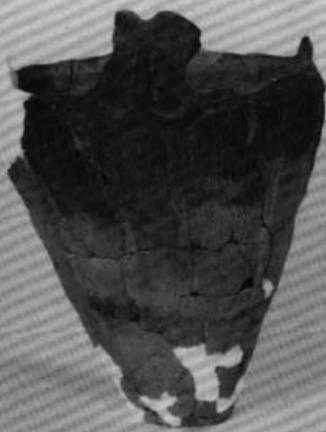
29



30



32

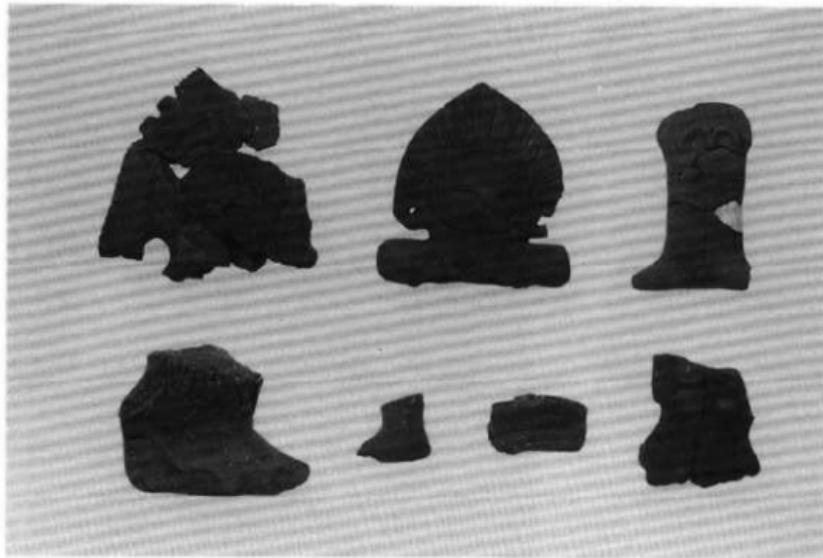


31

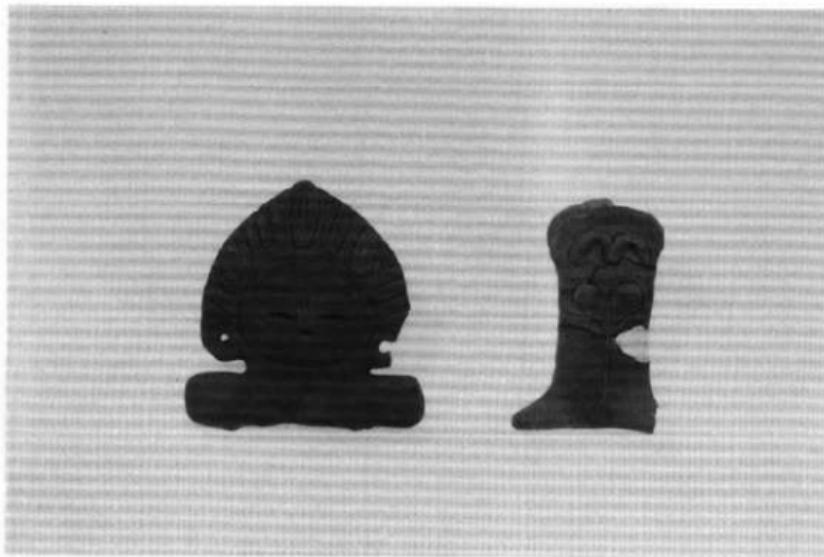


33

29・30. 45号 31. 44号 32. 160号 33. 628号



出土土製品



273住（左）、276住（右）出土土偶

西原土地区間整理事業第Ⅰ工区
第14次調査報告書①

中越遺跡

1995年3月15日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおづき書籍舎
長野市柳原2133-5

